



本朝文鑑

卷一

共五卷



~ 5
2229
1



利5
門
卷
229



一
卷

本朝又鑑



明治
藤野
氏寄贈

年
月
日
藏



獅子菴遺稿



選本名文鑑序

藤野 漱氏遺愛記
連二二序

昔より流るる連能のありては、言も文章あれ
連能も文章あり、文章を能くするといふも、
能く文章の作にけくあり、高きも在、固きあれ、
其も亦、部ありて和漢の文章、一人とかく、
よそにその端とせられ、あり、い、い、い、
中、あり、い、い、い、い、い、い、い、
あ、の、い、い、い、い、い、い、い、い、
い、わ、か、し、い、い、い、い、い、い、い、い、
あり

能諧と云は進ありてはしく古くとらわらふも及ぶと
 んの計ありてはしく人の場なきも自在ありや
 先ト上より人より一歩より里と云れどもはた連
 なる文章の字格と云ふはつらつらと云ふは
 て原中独衣のわたりと云ふは連字と云ふは
 ともいふはつらつらと云ふは連字と云ふは
 既しちつらつらと云ふは連字と云ふは
 と云ふはつらつらと云ふは連字と云ふは
 ありとも其内は文字のふと云ふはつらつらと云ふは
 かの宝つらつらと云ふは連字と云ふは

と云ふはつらつらと云ふは連字と云ふは
 かつらつらと云ふは連字と云ふは
 名鑑ありてはつらつらと云ふは連字と云ふは
 辭の類とありて五七の詠路ありと云ふは
 布世の字ありてはつらつらと云ふは連字と云ふは
 かつらつらと云ふは連字と云ふは
 て八代の裏とありてはつらつらと云ふは連字と云ふは
 かつらつらと云ふは連字と云ふは
 抑よりつらつらと云ふは連字と云ふは
 の差ありてはつらつらと云ふは連字と云ふは

五人のふとりて我家の名と新文あはし今日
うらむ七人の名にいふしつ海人のさかしくりや
海人の原くはしや海人我人の海高田もはらね
常永乙南の比あし湖東の五老井よりまよとあふさ
凡俗又選とむさうのありはらう我々の作るの
まよにまよ二に章もあしつ選名いふゆの作意 自在
ふれつ此語の意地とまよしくりて一人連字師の
敵とれあしんまよと今日此選場もた今日之章の
解とまよいてまよ一人金玉のありあしわすて
虚實とまよはしんまよ一人まよるまよんと我師

五ヶ條の法と書して文章の家のか同さふとんせふ二
一之章の虚實とまよ一教書詔牒の記論あは
一之章の起結とまよ一各句の断接まよ
あはれい皆あり一之章の二句の長短とまよ一各句讀
の法あはれい読まよ一之章の假名と真名の
断とまよ一之章の遠地のものあはれいせら
一之章の此語の字格とまよ一人連字師の法を
あはらう一之章の此語の格ありて後の人として
今の人とまよまよいさけとんせふのまよとつをたて
師家の名とゆきまよ一人の句法とまよあは

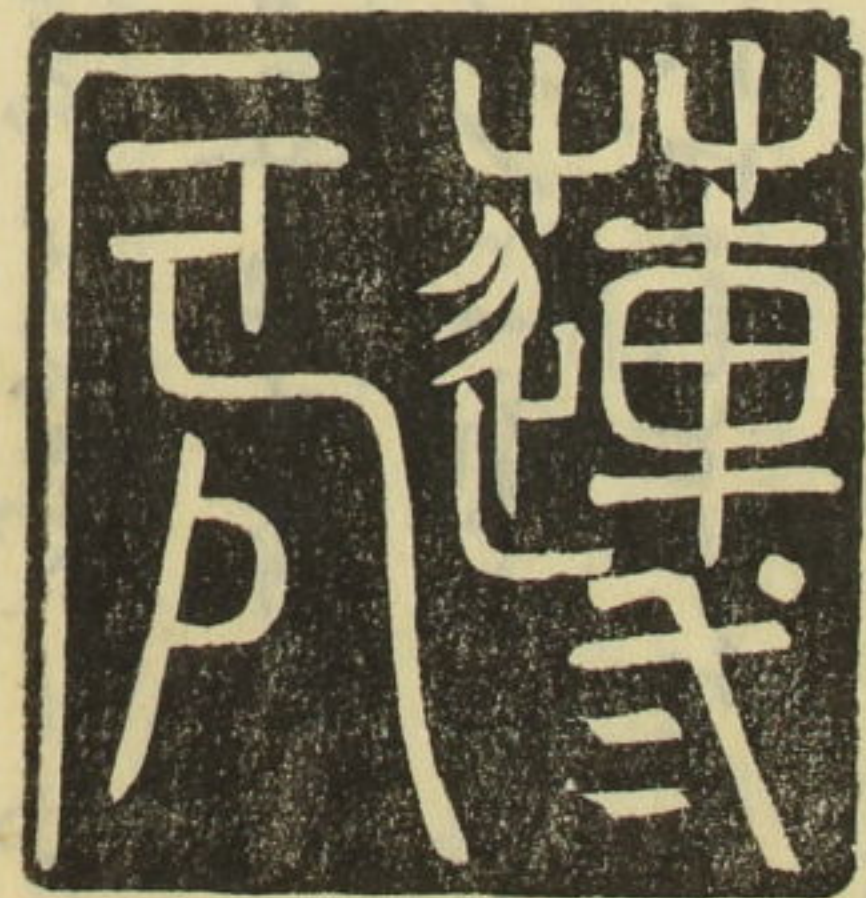
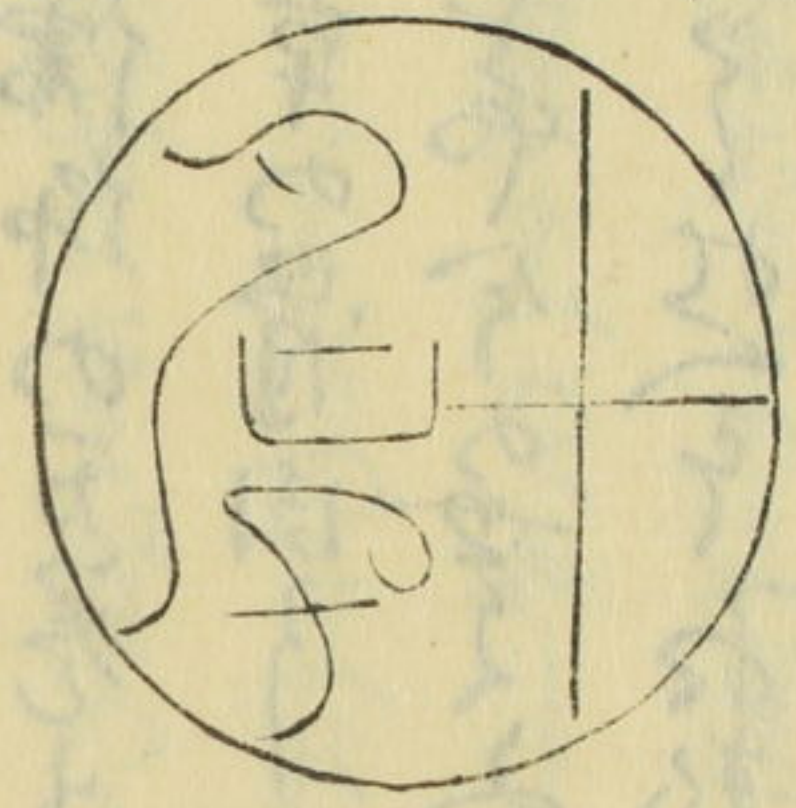
本朝文鑑

と新文の字は格と云つてふ也しと云ふと七十金と
えりし我輩の餘力ありしとかく遺誡しされ也
多しりのり蓮二の碑と机右の選りかけ白ねの眼
と燈下の註しありつて本約文鑑の口子と題し
我々の奇類とありし次は漢書の詩類ありし
と余ら深き子の文選しありし一帝王朝臣の
も上高農史のいやふもきしと瀾王の廳の書
張ありしとくしと云ふれりて凡新ありしとやれし
文章の中西すの事と賢の及と云ふは君父田中
と云りけ鬼神の心と感とありし何ん虚言の

偶ふよにらては五ヶ條の才一と云ふ言語よはかり
の抱りて儒師の二カ巻しつて益と云ふは一才二
才と云ふ文章の骨肉とて才の中五と文章は皮毛
ありしと云ふ今世の世と文章と云ふ人の一氣を動の
骨肉と云ふ此と云ふおれの手と皮毛と云ふ
才一才一の虚言と云ふ不自在ありし何と文章の姿
とい何と文章の情とて百世のなははつてふ
と云ふ此浮言南語より凡雅と云ふのりし四非と
云ふ先師のつて六一と云ふと云ふの悔ありし
と云ふ我輩のちのいさふありしと云ふ永の幸知し

一、貴の志とてんひて享深の丁酉ノ二、牛の功とてんひ
ちる也

惟千惟支子孟秋日



註^ルお又鑑^ラ序

渡部狂

爰に。我師のつゝあり。此一句ハ發端ニシテ爰ニト
ハ發語ナリ然レハ世ニ序ニハ

世詞ヲ以テ兩所ニ意ヲ分ク然レ但シ
論語ニ述ニ而皆備ノ辞ナトモ見レシ此語もとて入度ニ序ニハ

おふて。此一句ヲ起語ト云イ或
ハ句讀ノ句トモ云ナリあゝと作るといふ。

あゝと巧言といふ。此二句ヲ結語ト云イ或ハ讀トモ云ナリ
總テ起結ト句讀トハ同意ニ似テ

少シ遠クアリ世序ニハ句讀ノ直ラ加フル故ニ起ナリ結ナリトハナリ云イテ
句讀ヲコトハラス去レト句中ノ句アリ句中ノ讀アリ讀中ノ讀モ亦凡

一レ但シ句直ハ常ニ
ハ句讀直ハ中ニナリ此面ノ桂是身も我中ノ事といふ。我

とて我身也老やあゝん。此二句ハ起語ト結語トナリ
但シ四面ノ桂是身ト桂是身

ノ元ノ時ナルハ佛諸師ノ声ニ喩ナリ老ヤシユ下
ハ佛諸ノ妻ヲ知ハ己ヲリフテ人ヲトカメキルノ謂ナリ

万物ノ生レ異滅ありテ。 此句ハ起語ニシテ
四相ハ世々變ナリ大ある付ハ

百却スル者。 此句ハ同ト結語
ナカラ下ノ句ニ

連獲セリ 此等ニ句讀角 年月日時之變のほたつん
ヲ知レシ季曲ハ世次ニ註ナリ

此二句ハ讀中ノ讀ナリ而却一年一月一時ト前ニ續キタルハナリ前
ノ二句ハ大少ニテ後ノ二句ニ其中ヲ云ハル是ヲ錯綜顛倒ノ法トナシ

テ大中ヲカキニセタナリ 此等ナリ 常
トハ四手ノ轉義ニシテ然トナラン ちるに。 此佛説ハ 上ハ返ス

次ハ起語トシテ何レモ句ノ意トキ或ハ發語ト起語トナキ或ハ返辭ト起語
トナリ時ハ縁ニナリト向ナレハ同シトヤキヤキ故ニ上ニ句ノ意ヲ

加ヘ下ニ讀直ヲ加フ是ハ註者ノ心得ニシテ佛文
ノ意ノ故實トモ云ハシ以下ハ總テ此ニ句ニ效ラシ守武宗鑑ナリ

て行テ。檀林のぬふく滅一々。 此二句ハ結語ナリ
檀林ノ後ト維波

ノ字因ヨリ變動ニテ其
後ハ長短ノ句ニ減セリ 此の句ニテハ入十余ノ句ナリ

此二句ハ變滅ノ物ニ結語ニシテ
古代ノ佛諸ノ四相ヲ云ナリ 今此佛諸ハ宛率のゆたなり。

秋万のえんとくふし。 此二句ヲ句中ノ讀ト云ニシテ多ニ語路
ノ新讀ト云古ナリテ世ノ文ニナニ

此二句ハヤメナリ 此新讀ヲ知ラレハ長句ニ直
ツキ所ナシ 一ノ句ニ二句トナセハ殊ニ大句ノ句讀ナリ 古比の師の二音

その。隨類得解の返とあはふ。 此二句ハ讀中ノ讀ニシテ是モ
大句ノ句法ナリ古池や蛙

トヒユム水ノ清トハ故云雨ニ正風ノ始ニシテ世ニニキタル及在句ナレハ強勸山山世
ノ佛語ニ喩フ如来一音演説法ハ衆生隨類各得解ストハ天下ノ

所人ノ様々ニナリタル云ヘリ 此ノ二句ニ
内流ノ分レラズナリ已ニ變動ノ四ヲ含ム

はときくし。 此二句ハ讀中ノ讀ニシテ 古池や蛙

此二句ハ起語ナリ 此二句ハ讀中ノ讀ナリ 冬ノ二句ナラ雪ニ言セ
テ二句ニ云ハル意ハ此句ニ起語ナリ去レハ佛諸ノ正風ハカ物ヲ云ナリ

其所ヲ失ハスト詩奇
正道ヲ花鳥ニ云リ秋をねまよふ藤の又部とくあし

てア原の曲ニ云ふは後もたふぬ一。此二句ハ結語ト

己句ヲ起語トシテ連云ノ句ヲ結語ト見ルニ總テ此四句ヲ數思各

互見ノ法ト云ナリ己句ノ向ニ西季ヲ云ル故ニ其冬ノ二子ヲ數思各

レテ春秋ノ二子ニ互見セリ或ハ前ノ句ニ花鳥ヲ對シ是ヲ句對

ノ法ニシテ互對トハ遠イアリ或ハ此二句ハ知花ノ夏ト千鳥ノ冬トヲ

雪ノ子ニ隔タレハ雲土ニ受テ格トモ云ハキカ或ハ秋ノ句ト春ノ句ト

知花ヲ隔テ字對スレハ是ヲ句對ノ法ト云フ總テハ錯綜トモ見ユ

ト四子ヲ己句ニ云フ時ハ互見ノ方ニ定リ又然レハ此四句ハ種々ノ

文法アリテ己句ヲ起語トシ己句ヲ結語トスレハ古今ニ致シキ句

法ニシテ多ク文章ノ數舞ト云ナリ去レハ結句ノ遠まトハ故論

ノ正凡ハ四季ノ自然ヨリ出テ花鳥ノ情ニ私ナラシハ凡雅感

優モ盛ニト俊成
ノ奇ヲ情テ云リ 是レ何と云ふも二十余年ト云フ。新し

奇とあふたふ。奇くらまふたね。此二句ハ起語ナカラ

前ノ一句ヨリ二句ヲ

生シテ全ク句中ノ句ニシテ長短ノ句法ノ鑑ト云ハシ或ハ新奇變々ト云

ヲ以テ四体ニ分ケテ二句ニ對シタル正しくハ新奇變々ノ四相ナリニ

奇ノ子ニ上下ノ節アリテ是ヲ互照ノ法ト 減てしや十

云リ數思互見ニ似テ少シ遠イタル所アリ 減てしや十

くハ過るる一。此二句ハ古今ノ俳論ノ總結語ナリ但し二十

結語トナシ中間三句ノ短語ヲ用イタル是ヲ減てしや十

隔句ノ法ト云フテ隔對ノ如ク字ヲ對セサレぬ。此二句ハ

此語の文章ありて。百世の人此從あるんふら。

彼と於て是とぬあひらんや。此二句ハ句讀中ノ一休ナリ

後ノ一句ハ讀中ノ讀

ナリ然レハトハ返辭ナリ

此句ハ序者ノ物結語ナカラ決テ前生後ノ句法アリ多ク此各ノ二年トハ

師ヤツテ終正ノ記ヲツケリ東西ニ華ノ号ヲケリテ濃ノ苦山ニ踏ラカク

セルカ實ニ俳語ノ變ヲ知テ

獅子庵ノ遺稿ニ此古アリ今や又鑑の時人のたふす。

本朝文藝

枕詞の要とつゝふふあつた。世二句の起下結の脚

又周囲の玉と着過して。故宮を瓦とつゝり人

あしん。世二句の意對ナリ文字の配りハ對セ下玉ト瓦トノ意對ナ故

味ハ三聲言ハ杜律ノ野花河魚モ二句ニ意對シテ

一旬ヲ二句ニ分レ故二句ノ意對ナリ又法ノ變ナリ

於てとつゝり。世一段ハ枕詞ノ詞ヲ返シテ世序ノ

又序ヲ讀ミテ序詞ハ是ニテノ意ナリ去ハ世段ニハ句讀ノ意多ク上ノ詞ヲ

括辭ト云フ下ノ詞ヲ對辭ト云フ括辭トハ見スヤ句スヤト倍語ニハ

人ヲ括ルト云フナリ。世二句ハ前二

十ハ発語モ發端モ同じケト前二ハ枕詞ノ枕詞ヲ云フ

又三ハ又五序ノ枕詞ヲ云フ同句ヲ兩所ニ用ル又變ナリカ

とつゝり。世二句ハ前二句ノ起語トナセリ是ハ本注ノ法ニテ前ノ本注ヲ

注釈セリナリ本注ヨリ韓退之カ所説ニ句讀ハ重ノ重ニ云ト枕詞ノ

又者ノ其レヲ知ラサルハ假名ニ詞長短アル故ナリ聲ハ後ニ明クナラ後二ハ

アキラカト四字ニヨリ。世二句ハ前ノ詞ヲ倍テ

況ヤ漢書ハ文字圖ナリ。世二句ハ前ノ詞ヲ倍テ

世二句ハ前ノ詞ヲ倍テ。序者ノ起語トナセリ

とつゝり。世二句ハ前ノ詞ヲ倍テ。序者ノ起語トナセリ

其時ハ二句ノ向ヲサシメテナクニ作レシモ又字ノ長短ヲ入レテ諸語ノ足

ラヌヲ云ナリ聲言ハ人之可書而人之不可知ト云ク付ハ而字ハ助語ニナレトモ

讀ミナリ法ハ微尚所ヲ知レ但シト。世二句ハ前ノ詞ヲ倍テ

此句ハ左語ニテ誠ニトハ決辭ナリ去ハ決辭ト云フ内ハ上ニ字ノ詞アリテ下ニ
二句アル内ハ何レノ詞ニテモ句互ラ加フレ但シ百ノ内ハ下ニウキテ句讀ノ句ハ
ナクテモ言アラヌ也百ハ
決辭ラ云ハ二加ヒナリ 一屈押復用の長短としらる。教量

先教のふまよひ對と。此二句ハ結語ナリ但シ屈押之教ナリ
用ラズ一リ然ラ長短ニ交々ノ二様ヲ對セル也等ヲ子對心得トスレシ
むモ杜詩ノ對ナリ熊子ハ大ニリニテ教量先教ハ等々對セルナリ 此と漢字

二句ハ下ノ句ニウキタレ
ト是ヲ句中ノ讀トレ

一但シ本朝文粹トハ其ノ等ノ文ニウキモ似タラシト云々ニ假名直名各ノ
通用ラズ一ルナリ去ハ我師ノ文章ハ大ニ和漢ノ通用ニテ例ノ遺稿ニモ

又賦ト目外ニ四五等節モ假名直名各トニ各テ物アリ去ハ右ノ二序
ノ假名直名各ハ意通シテ等ハ別ナリ去ハ右ノ二序ノ手本波トモ漢文等

ト漢ハ又然モ條ニニテ
然モ條語ナリ故ニ此詞ノ白示天レ此レ所也

上ノ物結語ナリ去ハ右ノ手本波又ハ右ノ手本波モ去ハ右ノ手本波
リテ詩ヲ論シ去ハ我師ノ通用ニ我ヲ折ラテ下ノ痛ヲ條語各ノ條

歌人の文はら。此句ハ上ハ左語ニテ下ハ起語
ナト下句讀ノ句ハ前ノ註ニナリ 此レ所也

かゝるのふまはあやう。此二句ハ一白ニテ讀中ノ讀ナカク是ラモ
語路ノ斷續ト知レシ前ノ宛奉ノ句ハ

句中ノ讀ニシテ去トハサレ漢字ナリ句讀ハ此等ニ通ラズニ誠ニ此二句ハ今ハ
ナレハ句中ニ新ナリナリナリナリナリナリナリナリナリナリナリナリナリナリ

ハ長句ヲカレ又格ニシテ漢字ノあやういふよあめん。此二句ハ
此序ニ句讀ノ備ナラン 結語ニ

レテ前ノ長句ヲカケテ短語トナセルナリ句モ二句ノ語ナカク長句ノ
物子ニテ前ノ二句ヲ結ス也等ニ長短ノ法ヲ味フレ總テハ長々短々トナフ

中ニ長短入レナカレ 此等ノ字格トイふ也。此二句ハ起
ハ文者ノ備キト云ヒ

ノ字ハ左語ナカク 假名直名トシ 假名直名トシ 假名直名トシ
或ハ左語モ有レシ

假名直名トシ 假名直名トシ 假名直名トシ
假名直名トシ 假名直名トシ 假名直名トシ

假名直名トシ 假名直名トシ 假名直名トシ
假名直名トシ 假名直名トシ 假名直名トシ

假名直名トシ 假名直名トシ 假名直名トシ
假名直名トシ 假名直名トシ 假名直名トシ

假名直名トシ 假名直名トシ 假名直名トシ
假名直名トシ 假名直名トシ 假名直名トシ

假名直名トシ 假名直名トシ 假名直名トシ
假名直名トシ 假名直名トシ 假名直名トシ

ト打捨テ蓄然ノ用ヲ次ニ云ルナリ但シヤハ下ハ起結ノ註とあり

アル事語ニテ後天ニ任他ト答テサモアルナリ起結ノ註とあり

起結ノ註トアリハ句讀点

ヲ添ヘタルトナリ云キニ上ニテ下ニハ下ニテ上ニハ下ニテ

下ニテ上ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ

上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ

下ニテ上ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ

上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ

下ニテ上ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ

上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ

下ニテ上ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ

上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ

下ニテ上ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ

上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ

下ニテ上ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ

上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ

下ニテ上ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ

上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ

下ニテ上ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ

上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ

下ニテ上ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ

上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ

下ニテ上ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ上ニテ下ニテ

ト云イ或ハ句中ノ讀圧云イテ讀息ノ終リヲ一ウト見ルレ去ハ漢文ノ讀ト句トヲ合テ一ウノ外ヲ一ウト云ハモ倭文ノ句ト讀トヲ合テ一ウノ外ヲ一ウト云シモ總ニ先後ノ違テト上下漢文ハ讀ヲ先ヲ中間ニ点スル中ニ在ル点ハ中絶ノ意ニ其所ヲ句絶トヤ云ハキ字書ニ讀字ノ註解ト按書ノ点式ト取リ違アルヤ倭文ハ句ヲ先ニ^{カクハラ}方ニ点セハ語ノ絶^ト又印ト知リ讀ヲ後ヲ中間ニ点セハ語絶ル印ト知ラン但レ中ノ点ハ連續シテ方点断絶ト云ヘル点式ノ道理モアル事ニヤ今ハ和漢ノ差別ヲ論スルハむモ後勘ナカラシヤ法ハ知リヤスキカニ隨フレ但レ此序ニ云ル^{カクハラ}各語ト起語トノ二点ハ同ク方点ニシテ註キ時終レラン

文法

序文 発端 発語 起語 結語
 返辞 决辞 釘辞 歎辞 括辞
 語路 助語 押字 抱字 句頭
 枕詞 句拍子
 句讀 長短 語路 断續

句格

數畧互見 結之明生後 錯綜顛倒
 奪胎植骨 無心所着 上中下畧
 雲土夢 長短句 鱗碎 鳥鼠

本朝文法

互照 倒將衣 藏頭 藏尾 雙交圍
首尾 文對 意對 句對 字對
隔對 隔句 墨語 墨字 變態
本注 頓挫 函云 隱見

右四十餘條アリテ文法トハ一篇ノ法式ヲ云ク句格トハ句ノ格例ヲ云ヘリ但シ和漢ノ兩用ナリ或ハ本傳胎換骨ト古人ノ文章ノ類ヲ借テ意ハ各別ナルヲ云イ或ハ雲土夢トハ連續ノ語ヲ分ケテ文ニ撰様ヲ附ルヲ云フ譬言ハ月花面白ト云フ月ハ面ニ花ハ白ト云ハシカ如シ書經ヨリ出タル文格ナリ或ハ蟋蟀トハ先ニ云キ古ク後ニ具名ヲ發セルナリ詩經ノ七月ニ此格アリ或ハ白鳥滄海編幅ノ物ノ何方ニ毛絨ルハ右ナリ或ハ雙園ハ一物ヲ以テ上下ノ儷アル右ナリ其餘ハ字面ノ訓解ニ知ルシモ毛虫字面ニ法格アラシモ一篇ノ下ニ註解アルハ其外ハ其篇ニ效シ

題註

歌 水川詩式ニ水云フ謂之歌也
詩 詩經序人心之感物而發言
賦 陸機文賦 体物而瀏亮
行 詩人玉屑 体物行書 曰行
吟 文選註 吟 誦也 詩人玉屑
曲 詩人玉屑 体物行書 曰行
引 文選明辨 大畧如序而繼
謠 詩人玉屑 通雅 俚俗曰謠
辭 古文詩式 寄情深而語緩

箴 詩經註 箴 刺也 駢
論 文式 論 曰 曲折深遠也
傳 約會 史中紀載 實跡
記 說文 謂一々分別 記之
辨 說文 罪人相與 說也 文式
頌 朱子詩傳 頌 美也 樂歌
贊 朱子詩傳 贊 明也 立置 有傳

本朝文鑑

銘 札記 諸君書我之辭 曰銘也

表 又選本註表 明也 禮也 如物之標 或曰 顯 政也 曰表 陳其美也

教令 教也 亦曰令 告戒也 亦曰 教令 亦曰 訓也

書牘 約會書 字 其言 如 其言 意也 常 狀 猶 言 也 狀 狀 見 人 也

序跋 說文 序 中 西 簿 也 廬 曰 次 才 之 語 也 章 跋 足 也 私 曰 序 之 先 後 者 也

對向 說文 對 應 無 所 也 或 曰 分 寸 法 度 也 韻 會 引 說 文 曰 向 訊 也 勝 也

日記 說文 日 記 往 來 也 紀 與 記 同 私 曰 日記 曰 本 朝 多 用 記 用 之 謂 也

碑文 說文 碑 石 也 紀 功 德 之 事 也 運 載 當 用 木 也

弔文 文 選 為 弔 祭 葬 也 弔 弔 向 之 異 也 私 曰 可 言 以 書 而 訪 向 也

昔ヨリ文章ノ題名ハ黒白ニ明ナラス大慨ハ似タル物多シ然レハ和漢ノ文章年序ニ有尾ノ文ヨリ心得アラシカ既ニ文選ニハ弔屈原ノ文トアルニ右文後佳ホハ賦類ニ入レ滕王閣序モ或本ニハ記類ニ入レタリ然ラハ漢文ノ字者トテモ分明ナラストハ見タリ去レト文鑑ノ論ニ云ハコ屈原賦ハ元々弔弔文ナルヲ滕王閣序ハ記トモ云ケレトホニ到リテハ賦ト云ハシカ閣ニ序ノ字ハ如何ナラシ但シ此類ニ序ノ字ヲ用ケハ滕王閣ニ遊フトカ會スルトカ云ハシ是ハ其書ニ詩アルヨリ不審ニ序ヲ置ケルナラン等ニ選者ノ好悪ヲ知シナリ本ヨリ文章ノ題名ハ諸抄ニ其註ハ明ナレト一字クノ上ヲ註シテ字面ノ似タルハ分明ナラス也故ニ其名ノ紛ラハシキ合セテ多ニ註解セリ尤モ其題ノ似テ似サル者又ハ字義ト字訓ニ少ク宜ナラン總テハ

本朝文鑑

十三

二十金題ナランヲ言マニ二十七題ヲ舉ケテ不似ト相似トノ差別ヲ
 註スルニ澤文ノ筋ハ殊ニ知ラズ條文ハ多クニ分明ナランカ
 或ハ詩ト歌ハ凡雅ノオトスル物ヲ法格ハ本ヨリ出ルニ於テハ
 文選ナトノ部ニモ歌行曲吟ノ類ヨリ引モ辭モ詩類ノ中ニ
 散在セリ何レモ此名ノ詩ヨリ出テ詩ヨリモ變化所ヲ知ルレモ
 詩歌ノ兩題ハ多クニ細註スルニ及ハス
 或ハ歌ト行モ尤ハ相似ス物ト知ルレシ詩人玉屑モ相兼テ歌行ト云
 トアリ去レト氷川詩亦ニハ言フ水レ情ヲ放テテナクニ法格ヲ定メス
 凡レモハ或ハ長短ノ句拍子ナランカ但レ此類ノ中尙ハ石見ナト
 云ル短語アリテ樂府ノ常語ナリト註セリ詩ヨリモ法度ヲ有キ
 ヌレハ條文ニハ体モアラン本ヨリ和音ハ註スルニ及ハス
 或ハ賦ト記トモ相似ス賦ハ當ニ前ノ物ヲ合テテ文法ニハ流ラズ

レ記ハ往古ノ起リヲ記シテ文法ハ實体ナルレ但レ賦ニ叶韻ノ法モアラン
 或ハ辭ト云フ時ハ詩ト騷トノ声ヲカキテニ体モニ歌フレトモ澤文
 ノ辭ヲ見ルニ何ニテモ其古又ヲ序シ其事ニ辭アリテ必ス叶韻ノ法ヲ
 用ユ先ハ古人ノ澤文ニ隨フレ去レト書籍ノ論ニヨラス平語ニ辭ト云フ
 時ハ條文ノ体モ有ラシカト我レハ誠論アリ後ハ凡俗辭ニ見レシ誠
 澤文ハ文字固ニシテ我朝ハ手本皮ノ固ナレハ辭トハ助語ノ古又ニテ用ヨリ
 モ日本ハ詞ノ微情ヲ尽セリ然レハ辭ノ体ハ後勤アルキ古又ニテ用レ但
 字書ニ辭トモ辭トモ俗字語子ノ論アレト文鑑ハ總テ讀マスキロニ
 隨フ自是ヨリ以下ノ字論トテモ一ニ効ナレシ
 或ハ曲ト云フハ今曲ニ情ヲ尽スレト註シタレト何ノ文モナクテカ鹿相
 ニ合テ今細ニ情ヲ尽スレシキ曲字ノ註ニハ不實ナリ條ハ澤文
 カ曲調モアリテ志ハ今曲ニ近キ物ナリむモ和音ニハ固曲ト云フ

ハ物附ルト云フニ抑子ヲ抑子ヨリ十二抑子ト定テ向脱ト云フハ抑子
 ナレバ漢ニ長短ノ句法ナドモ等ノ唱ニ知ルキカ
 或ハ吟ト云フ時ハ物ヲ感スル所ヨリ文字ニ沉思ノ功アリテ我ト物思
 歎息ノ語音ナレハ虫蟬ノ註ニ吟字ヲ尽セリ後ニ白頭吟モ倭ニ
 負其吟モ文法ハ但シ歌行ノ類ナラン
 或ハ註トハ世間ノ風俗ヲ示シテ里中ノ諷ヲ示スレシ或ハ歌子ト書
 ナル所ハ歌ハ琴ノ唱ヲナト見レハ等耳ノ只モ明ナリ和琴ハ各別
 或ハ引ト序トハ長短ノ差別ト註シタレト序ト引ハ各別ノアアリ強
 テ序引ノ差別ヲ云ハハ序ハ詩ヲ支ニシテ何ノ詩ヲ序ト云イ
 引ハ詩ヲ後ニシテ何ノ引ヲ序ト云レシ但シ引字ハ誘引句引ノ
 二義ニテ詩ヲノ余情ヲ誘イ出スルナラン既ニ文体明辨ニモ引トハ
 君ヨリ以後ノ題各ニテ引ト各ルノ美分明ナラスト毒ハ引類下ニ註ス

或ハ論ト解トハ各別ノ趣ナラテ論スレハ解スル理アリテ尺百ニテ見
 レハ其文ハ紛ルナリ去レト論ハ元テ相對スル物ヲ論レ解ハ天子
 一物ノ理ヲ解ス論ハ悉ク物ヲムツカレウ云イカテ曲折深遠ニ
 論スレハ解シテモ其レヲ論スル古又ナリ
 或ハ説ト辨トハ物ノ理非ヲ一合シテ明辨ニ説ケル所ハ相似タレト
 説ハ虚誑ノ理ヲ以テ人ノ心ヲ感動シ辨ハ實有ノ理ヲ演テ其
 古ニテ辨別スレハ説辨ニ様ハ各別ナリ倭文ニ虚實ノ取違アリ
 或ハ記ト銘トモ相似タレト記ハ其旨又ヲ記シ銘ハ其旨ヲ銘スト
 云レシ況ヤ銘ハ簡約ニシテ文ニ法アリト註シタレハ多ク序詞アリ
 銘アラシハ記トハ各別ノ所アリ但シ紀ト記ハ同シ
 或ハ傳ト記トモ相似タレト人ノ起リヲ傳ト云イ物ノ起リヲ記ト云イ
 此等ノ通理ヲ故實ト云ナリ或ハ傳記モ傳類ニ入ルシ

或ハはりト類トモ似タル所アレトモ高ハ似テ趣ハ異ナリ領ハ口物ノ形容
 頌シ類ハ大方ハ人口ヲ替ススむ字ヲ其通理ハナケレモ其等モ
 故重ト知ルキナリ但シ誦字モ通用ナリ
 或ハ天表類トシテ君父ニ奉ル天表モ似神ニ捧ル生口文類ナト
 總テ此題ニ入ルレテ表表ハ上ニ奉リ書状ハ下ニ解レモ同其軍ニ
 贈答スル題ハ紛ル物ナレ但シ誦文モ折言類ノ詞アラシハ
 或ハ書状類ニ申出テ其書ハ勿論シテ移文様状ナト入ルレ
 但シ移文トハ本朝ノ題ナリ
 或ハ教令類ト題シテ皇教ノ類ハ勿論ナリ或ハ寺社ノ制ナ
 フルレシ教ハ安堵ノ教書ニシテ令ハ王者ノ令命ナリ
 或ハ對向ト云フ章ヲ先ニ理論ヲ後ニト云レ向者ハ向ヲ設ケ對者
 ハ對ヲ設ケテ文法ニ鼓舞ヲ尺ス碑言ハ雜陳ハ理論ヲ先ニシテ

對向ノ理論ヲ後ニト知レレ本朝文粹ハ對冊トナリ
 或ハ日記類ト題シテ行状終事ノニ記ヲ入レレ或ハ紀行ト云フハ
 日記ノ中ニ入ルキナリ總テ記類トハ各別ナリ
 或ハ碑文類ニハ碑銘墓誌トナレレ總テ此類ハ序アリテ其銘
 墓誌ナトアルレモ墓誌ノ論ハ碑文類ノ下ニナリ
 或ハ帛文類ニハ冬夏衣類ナト誦誦文ヲモ含ムレレ但シ此類ハ死期
 ノ哀傷ヲ演ヘテ指シテ法格ニカハラサレカ表ハ碑文類ナトニ異ナリ
 或ハ條文ノ自由ヲナサレナリ此等ニ和漢ノ差別ヲテ文章ニ私ナレシ
 或ハ誦ト云イ帛ト云イ冊ト云イ啓ト云イ策向ト云イ彈右又ト云イ
 皆以テ條文ノ各ナラヌ本ナリ條文ニ後語ヲ用ユル時モ文字ノ安否
 其ノ細意ニ心得ルレレ此等ヲ文鑑ノ筆格トセリ況ヤ帛人帛道ノ
 各ナリ但シ設論ハ對向ノ類ナカラ論類ニモ接スレレ文記述ノ各雜

實獻十トハ増シテ既諸多格ナリシ然ルニ連珠類ト云アリ世名ハ
題名ノ類ニハアラテ文格ノ中ニ入ルキニヤ
或ハ文類碑類十ト古文後集ニ題シタト文ハ詩賦ノ物名ニ
既ニ陸核モ文賦ヲ尽テ詩銘說論ハ其ノ中ニ在リ鳥文花文
十ト一字ハナレタル題名ハアルニ北山移文ハ撤書ノ類ナレハ古戰場ノ
文モ帛文ノ類ナリ去ト文選ノ集又ヲ文類ト題シタレハ如何ナル故
ニヤ知ラス或ハ碑類モ如何ナレ碑トハ木石ノ名ナレハ碑銘トハ碑又トカ
有レシト等ニ選者ノ鍊石鍊アレハ又ニ古文ノ屬有ラモ云ナリ誠ニ
古人ノ詞ニモ悉ク書ヲ信セストハ錯ヲ以テ錯ニ着ク故ナレシ

目錄

第一卷

歌類

天文歌 伊特諾 地理歌 伊特冊 人和歌 下照姫

南朝歌 柿本人麿 連奇 源賴朝 誹諧奇 貫之張

求韻奇 高市万呂卿 題名奇 芭蕉庵 七種奇 東華坊

字訓奇 秋之坊 念佛歌 雲居和尙 長恨歌 返奇 權大夫惟冬

詩類

四季花鳥 赤老仙 獅子庵 三詠 全 和屋賞花 左

和屋賞月 全 道途遊 蓮二席 花鳥詩 有感 渡部狂

秋思僧圓知 十月梅二行堂 俄憶從織 官六之

山中尋酒得巴弓 確坊之支石倫鬼 寄雲戀 石過角

所思文石 見月戲作各東羽 野系江北 所

送越左明渡吾仲 蠅非囊 管伊東照 行路難渡右靴

○第二卷

賦類

硯賦北手子吟 既聖賦芭蕉庵 涼賦渡吾仲

將基賦東華坊 讀將基賦村野航 和山賦岸昨囊

悠然賦種乙子 好色賦善好法師

行類

水波行岸昨囊 万歲行華表人

吟類

雨夜吟依言文

曲類

於曲作者不知 田舍曲左 東曲生仰坊 舞子曲東老坊

○第一卷

引類

富士引山部赤人 手習引東花坊

木月...

謠類

雨乞謠 盤珪和尚

石搗謠 衍主仁平

辭類

風俗辭 渡部狂 山境辭 休和尚

艷詞 第戎部 戲師辭 烏丸光廣

情捨子 辭 芭蕉庵 夕暮 辭 東花坊

鳥追詞 作者不知

歲類

雨居歲 芭蕉庵

猶戀歲 大邑靜

○ 第四卷

表類

告天滿宮文 袖常因 起清遊 宇山繁

報恩表 東平坊

教令類

雙文林寺修石碑教 渡部狂 二洛柿舍制札 白去来

書狀類

名之浦冠者狀 係賴朝 法文 蓮聖人 返狀 源中坊

酒成血 移文 播依渡 入道 贈丸栗老人書 東坊

二洛書 今川了俊 申之白 狀 蓮二房

○ 第五卷

論類

博學論 東華坊

博知論 西華坊

解類

念佛解法然上人九品解是仰序 天臺生主解

東老坊

地黃二煎解 桐左角

傳類

西王母傳 西行法師

應六坊傳 各馬岐

白狂傳 東老坊

記類

枕記 俗自室

白鷗堂記

本林石丸

柳子庵記 東華坊

往來松記

江北房

六花亭記 西華坊

○第六卷

序跋類

其袋序 崑雪 東山二句序 業堂

卜居序 白駒居二

觀音自述上座序 東花坊

了弟合序 蓮二房

千句跋 荒木田守武

啼鴉集跋

蓮二房

對向類

花鳥對

東華坊

影法師對

櫻木因

○第七卷

辯類

居耶辨 趙北枝 挑化辨 蓮二肩 伯鬼辨 東花坊 自得辨 北七里
梅長者辨 井童平 巴与 與杖辨 東花坊 招童辨 桐花角

說類

飽上人說 東山長嘍 各坊主說 應浪化 樗商人說 木字中
名說 優耶狂各二子說 木路身助 論師說 西花坊
夜話說 曾呂利 辻說 美說 露五郎吉衛

頌類

善高支地頌 二竹堂 右利須磨頌 木林百九
酌德頌 高九餅 松茸頌 川宣堂

○第八卷

贊類

淨土和讚 親善聖人 幸兜波寺町 扶見 芭蕉庵
六玉川前贊 僧大仲 六玉川後贊 向去來 我松讚 依弟伍
善高帝贊 鉅碧川 負讚 烏落人 負讚 讚 東華坊
致柱自讚 吾其角 讚 徒然讚 江北房

銘類

花桶銘 離立南 摺小本銘 藤如行 箸桐銘 西華坊
旅硯銘 桐花角 右硯銘 東花坊 盆銘 僧山草

本朝元鑑首

二十一

○第九卷

日記類

芭蕉云雨終焉記 吾其庵

庚午紀行 日四維坊

自造終焉記 東華坊

碑文類

芭蕉翁石碑銘 東華坊

圖司墓誌 野盤子

弔文類

生身魂系文 北七里

弔許文 渡部狂

提綱

一 呂氏カ又喜ラ見ル法ニモケ條アリ才ニ見ニ主張才ニ見ル
 規摸才ニ見ル細目同鍵才四見ニ主意有尾相應
 才五見ニ鋪序次第才ニ見ニ抑揚停表段才七見ニ計策
 之句法ト云リ去ルハ就選ノ五ケ條ニ擬ルニ口申カ才ハ趣意
 ノニシテ才ニハ文法句格ナラシ然レハ才四ニハ起結ラ云ク才六ニ
 ハ虚實ラ云ル其余ノ二條ハ則テ合セテニ室テニ女短ニ云ル
 ナラシ誠ニ虚實ヨリ起結長短ニテノ之條ハ和澤通用ノ文才
 ニシテ假名有女名ノ配リハ條文ノ式ト云ヘリ俳諧ノ業格ハ我
 ノ才ト云ヘル故ニ和澤ノ文法ヲ台セテ提綱ノ始ニ云ヘリ
 此書ノ初ニ歌類ヲ首トスルハ本朝文體ト云ル大意ニテ詩ハ

本朝文體

其言ニ對セルヨリ和漢ノ通用ヲ顯セリ然レハ才ニ賦類ハ和漢
ノ文佳キノ先トスル物ヲ賦ハ文章ノ全條ニテ其金ハ皮モ骨
或ハ吟行曲引ノ類ハ大ニ詩類ニ加フケハ暫ク賦類ヲ隔ツト
トモ本ヨリ詩騷ノ類ト知ルレシ或ハ其漢ニ詩類ハ所謂ニ詩騷ノ
要アリ出テ風雅ト俗談ト向ナル物トハ多ク又ニ文鑑ノ一格ヲ云ハナリ
其類ハ十八題ノ各ヲ交テ大概ハ文鑑ノ部ニ三效アリ

一 世書ハ古今ノ文佳キカラテ所著ノ作者ヲ主トシテ歌人連ツテ師
客タラシメ毎ノ篇ニ我家ノ子モ世理ニシテ文鑑ノ子モ世理
アラシカ然レニ我内ノ文章トシテ世選ニ教多クハ所謂ニ七題ヲ
考ルニ題トニ其カ法格ヲ出スハ他ノ文章ノ足ラナル所ニ強テ
數ノ篇ノ各ヲ出セル賦ニ難スク誠ニ恐ルレシ増シテ作者ノ尊卑
ヲ分ケサルハ題ノ子ニ次オアレハ唐ノ文鑑モ世故トシ

一 本朝ノ文章ニ軍書物語ナトハ文法句格モ有テカラ句讀ノ
長短ニカハラス偏ニ其言又ノ増ラ明ル物ナレハ文佳キノ筆格トハ
違イアリ辟言ハ源中秘衣ナトハ雷大名家ノ筆法ニモ效イテ
史記漢書ヲ主トナセル物語ト文佳キハ世等ノ差別ニ知キ
世書ニ源中秘衣ノ類ヨリ文章ヲ裁入テ私ニ題各ヲ
加ケタルハ楚辭ノ漁父等類ヲ裁テ辭ノ子ヲ加ケタル例ナリ但シ
此諸ノ筆格ニ近キ物ヲ選ビテ世文佳キノ節トハナセリ
一 文章ニ韵ヲ用ル古又ハ才ニ四声七音ヲ知ルレ四声ハ手上去
入ナリ七音ハ唇舌牙止齒喉ニ平上畫手各ヲ加フ或ハ汎中カ
四声韻譜ニ平上者而平上者而平上者而平上者而平上者
清而遠入声者直而促ト云レ或ハ説文ニ韵ハ和也語也
平出爲声成文爲音音實爲韵トモ總テ世等ノ

註ラ合口テ声音韻ノ差別ハ明ナレト倭國ノ人ノ漢文ニ用ル時ハ
字面ノ道理ノミヲ知テ詔路ノ音律ニ通セオレトハ譬言本朝
ニ官ニ品ニ仲ノ如キ人モ漢土ノ叶韻ハ覚束ナレ去ル漢家ノ
文章ノ韻モ或ハ有リ或ハ有ラストテ兎角ニ漢語ノ音律ニ通セ
テハ漢文ノ沙汰ハ推量ナリ然ルニ本朝ノ和音ノ中ニ或ハ韻字ヲ
用ケルニ倭國ノアカカハ分明ニシテ今ノ文鑑ニモ叶韻ノ法アリ
去レハ本朝ノ韻法ニ譬言ハ月ト云イ雪ト云イテ次ニ面白キト云イ
悲シキト云フ時ハキノ字ハ同字別吟ニシテ同韻ニ用ユキヤ古クノ
約法ニモ此格ノ見ユハ漢ニモ^キ咄ト^キ咄トノ如ク用ノ類ナシ然ラレハ
假名ノ叶韻ハアキウエラノ五音ナラフ總ニナクニシテ自由ナラシ
去レト春ノユキト平假名ニハ春ケレト秋ノフキトハ春カタレ其等
ハ作者ノ心得ニル^レソ月ト云イ人ト云イテ^レ音書ニモ假名ハ^レ辨^レ

ト或ハタヒト云フツキト假名ニワケテハ用捨モ有ラシカキヨリ假名ノ音
法トテモ四声^レ七^レ下ノ通韻ヲ知レハ一韻ナクテトモ^レ宛^レス約鏡通明
ノ人ニ尋又^レ通韻ノ古又ハ^レ難^レシ或ハ^レ長^レ句^レ節ノ詩モ身行ノ
類モ換韻ノ体ト云フ時ハ同韻ニ同字ヲ用ユシ古人ノ文法ニモ其格
アリ但シ韻ヲ隔ツ^レ或ハ^レ音^レ尾ノ韻ト云フ時ハ漢文トハ遠ク^レアリ
譬言ハ二句ニ韻ヲ用ケ^レ四句ニ韻ヲ用ケ^レ三句^レ四句ニ情ヲ尽シカキニハ
其向ニ四句モ三句モ韻ヲ用ケ^レ然レハ中向ノ句ハ云イ捨テ^レ總テ
世^レ漢ハ字不字ノ論ニテ^レ通不通ノ詮^レナリ或ハ假名ニ平仄ノ
論ニモ^レ詩類ノ序詞ニ見合ハ^レシ
一
文章ニ助語ノ古又ハ人向才^レノ要^レ又ニテ漢ニ^レ手^レ者也ノ四助アレハ
俣^レ手^レ余^レ遠^レ彼^レ西^レ鄉^レ有^レ然^レハ和^レ漢ニ^レハ^レ子^レ以^レテ^レ貴^レ賤^レ老^レ少^レ
口^レヲ^レモ^レ令^レテ^レ俣^レ手^レ余^レ遠^レ彼^レハ明^レナ^レトモ漢ニ^レ之^レキ^レ者也ハ明^レナ^レス

本朝文鑑首

去ル然レテ其ノ時ノ助子ノ音律ニ通セラル故ナリ世故ニ漢文ヲ讀ム
ル時ハ有ルヨリ西キヲ讀ヤスレ君ヤ傳文ニ手合波ナカレハ孩兒ノ
物云フニ墨ヲナラレ壁言一傳人ノ漢文ヲ各テ助子韻子ヲ用ケタルモ
唐人ノ言語ニ通セラル人ハ如何ニ傳子ノ文者トテモ是ハ決シテ信
用シカクシ漢ニ盡ル武ヤ助語解アルモ其子ノ訓解ハ明ナレトモ
外ニ向テ用ル時ハ一字モ自己ノ用ニ之ス又傳ニ際際裁カ用子格
アルモ傳ク古人ノ文格ヲ見覺ヘテ其子ノ訓解ハ明ナレトモ外ニ向
テ用ル時ハ一字モ自己ノ用ニ之ス又然ラハ西書ノ註要ハ君ノ音律
ニ通シテノ後ナラン此ニテ其外ニ二十余頁ノ助語ニ通セス
シテ我朝ノ漢文ハ大キニ覺束ナレト隣ノ其令好トカ知レタル
傳文ハ面白ラス知又漢文ニ骨折ルハ和漢二人情ノ常ナカニ漢文ノ
人ニ取ルキ長ナリ然ラハ我朝ノ文章ニハテニヨク助語ト云イフ全ルテ

助約ト云イテ其ノ時ノ助子ノ音律ニ通セラル故ナリ世故ニ漢文ヲ讀ム
ル時ハ有ルヨリ西キヲ讀ヤスレ君ヤ傳文ニ手合波ナカレハ孩兒ノ
物云フニ墨ヲナラレ壁言一傳人ノ漢文ヲ各テ助子韻子ヲ用ケタルモ
唐人ノ言語ニ通セラル人ハ如何ニ傳子ノ文者トテモ是ハ決シテ信
用シカクシ漢ニ盡ル武ヤ助語解アルモ其子ノ訓解ハ明ナレトモ
外ニ向テ用ル時ハ一字モ自己ノ用ニ之ス又傳ニ際際裁カ用子格
アルモ傳ク古人ノ文格ヲ見覺ヘテ其子ノ訓解ハ明ナレトモ外ニ向
テ用ル時ハ一字モ自己ノ用ニ之ス又然ラハ西書ノ註要ハ君ノ音律
ニ通シテノ後ナラン此ニテ其外ニ二十余頁ノ助語ニ通セス
シテ我朝ノ漢文ハ大キニ覺束ナレト隣ノ其令好トカ知レタル
傳文ハ面白ラス知又漢文ニ骨折ルハ和漢二人情ノ常ナカニ漢文ノ
人ニ取ルキ長ナリ然ラハ我朝ノ文章ニハテニヨク助語ト云イフ全ルテ
助約ト云イテ其ノ時ノ助子ノ音律ニ通セラル故ナリ世故ニ漢文ヲ讀ム
ル時ハ有ルヨリ西キヲ讀ヤスレ君ヤ傳文ニ手合波ナカレハ孩兒ノ
物云フニ墨ヲナラレ壁言一傳人ノ漢文ヲ各テ助子韻子ヲ用ケタルモ
唐人ノ言語ニ通セラル人ハ如何ニ傳子ノ文者トテモ是ハ決シテ信
用シカクシ漢ニ盡ル武ヤ助語解アルモ其子ノ訓解ハ明ナレトモ
外ニ向テ用ル時ハ一字モ自己ノ用ニ之ス又傳ニ際際裁カ用子格
アルモ傳ク古人ノ文格ヲ見覺ヘテ其子ノ訓解ハ明ナレトモ外ニ向
テ用ル時ハ一字モ自己ノ用ニ之ス又然ラハ西書ノ註要ハ君ノ音律
ニ通シテノ後ナラン此ニテ其外ニ二十余頁ノ助語ニ通セス
シテ我朝ノ漢文ハ大キニ覺束ナレト隣ノ其令好トカ知レタル
傳文ハ面白ラス知又漢文ニ骨折ルハ和漢二人情ノ常ナカニ漢文ノ
人ニ取ルキ長ナリ然ラハ我朝ノ文章ニハテニヨク助語ト云イフ全ルテ

本朝文藝首

二二五

勅子ノ入用ヲ知ルレシ譬之ニ用ノ手余波トテモ假名ト直名トノ間
 ニ置レシ此故ニ文跡ハ假名ト直名トノ兩用ナリ次ニ筆者ノ様式
 トハ譬言ハ月雲面也トモ花時鳥魚有テトモ直名ノ訓ニシテ
 續キタルハ但シ筆者ノ不様轉ナリ昔シ故云羽ノ幻住庵ノ記ニ
 云恩ハ三村足東南ニ馳セトルヲ云恩呈ヲ存足ト云テハノ子ヲ席
 シタルハ才シニ校者ノ不字子ト云レシ此等ハ五ヶ條ノ皮モト云レト
 倭文ニ云ハ骨ノ節ナラシヤ

一 陸士衝カ文跡ニ文ハ知ルノ難キニ非ス又ハ能スルノ難ト
 然ルヲ我乃ノ誠ニ世ニ文ニ草ヲ書ク人ハ有レト世ニ文ニ草ヲ
 知レル人ハ無レト云ニ世ニ草ヲ辨ヤハ知テ能ヤル者ハ少ク
 書テ知ラサル者ハ多クハ是ヲ提綱ノ上ノ要文ト見レハ
 總テハ文ニ草ノ公論ナルレシ



本朝文鑑才一

蓮二房

編輯

渡部和

註解

附序

歌類

天文歌

伴符註

地理歌

伴符冊

人和歌

下照姬

南朝歌

連歌

誦認歌

水韻歌

題名歌

七種歌

字訓歌

念仰歌

長恨歌返歌

詩類

附序

四木子、蒼鳥

獅子庵之詠

和漢賞花

和漢賞月

道遠遊

蒼鳥詩有感

秋思

十月梅

俄情促織

山中尋酒

碓砦之支

寄書戀

所思

見月戲作

野采

送越丸明

蠅

鴛

行路難

本朝文鑑一

歌類

平家物語

1

Handwritten Japanese text in a single column, likely a transcription of a song or narrative from the Heike Monogatari.

Handwritten Japanese text in a single column, likely a transcription of a song or narrative from the Heike Monogatari.

天子御宇 萬民歸心 禮樂興行 刑罰不施
 德教被遠 聲名洋溢 遠近聞之 莫不慕之
 夫德教之興 猶木之有根 根固則枝茂 枝茂則葉繁
 德教之廢 猶木之有蠹 蠹食則木枯 木枯則葉落
 故君子必先慎乎德 德有餘而後教加 教加而後政施
 政施而後刑用 刑用而後民服 民服而後國安
 國安而後天下歸之 天下歸之而後王道成
 夫德教之興 猶水之有源 源清則流潔 流潔則魚鱉
 樂之 德教之廢 猶水之有濁 濁則魚鱉不樂 魚鱉不樂
 則水涸 水涸則源竭 源竭則水竭 水竭則源枯 源枯則
 德教廢 德教廢則國亡 國亡則天下歸之 天下歸之而後
 王道成 王道成則天下歸之 天下歸之而後王道成

天子御宇 萬民歸心 禮樂興行 刑罰不施
 德教被遠 聲名洋溢 遠近聞之 莫不慕之
 夫德教之興 猶木之有根 根固則枝茂 枝茂則葉繁
 德教之廢 猶木之有蠹 蠹食則木枯 木枯則葉落
 故君子必先慎乎德 德有餘而後教加 教加而後政施
 政施而後刑用 刑用而後民服 民服而後國安
 國安而後天下歸之 天下歸之而後王道成
 夫德教之興 猶水之有源 源清則流潔 流潔則魚鱉
 樂之 德教之廢 猶水之有濁 濁則魚鱉不樂 魚鱉不樂
 則水涸 水涸則源竭 源竭則水竭 水竭則源枯 源枯則
 德教廢 德教廢則國亡 國亡則天下歸之 天下歸之而後
 王道成 王道成則天下歸之 天下歸之而後王道成

人ハ其ノ心ヲ以テ事ヲ成ルニシテ
 徳ヲ修ムルニシテ名ヲ立ルニシテ
 功ヲ立ルニシテ利ヲ立ルニシテ
 信ヲ立ルニシテ人ヲ信ジテ事
 業ヲ成ルニシテ徳ヲ立ルニシテ
 名ヲ立ルニシテ功ヲ立ルニシテ
 利ヲ立ルニシテ信ヲ立ルニシテ
 人ヲ信ジテ事業ヲ成ルニシテ
 徳ヲ立ルニシテ名ヲ立ルニシテ
 功ヲ立ルニシテ利ヲ立ルニシテ
 信ヲ立ルニシテ人ヲ信ジテ事業
 ヲ成ルニシテ徳ヲ立ルニシテ名
 ヲ立ルニシテ功ヲ立ルニシテ利
 ヲ立ルニシテ信ヲ立ルニシテ人

一ノ心ヲ以テ事ヲ成ルニシテ
 徳ヲ修ムルニシテ名ヲ立ルニシテ
 功ヲ立ルニシテ利ヲ立ルニシテ
 信ヲ立ルニシテ人ヲ信ジテ事
 業ヲ成ルニシテ徳ヲ立ルニシテ
 名ヲ立ルニシテ功ヲ立ルニシテ
 利ヲ立ルニシテ信ヲ立ルニシテ
 人ヲ信ジテ事業ヲ成ルニシテ
 徳ヲ立ルニシテ名ヲ立ルニシテ
 功ヲ立ルニシテ利ヲ立ルニシテ
 信ヲ立ルニシテ人ヲ信ジテ事業
 ヲ成ルニシテ徳ヲ立ルニシテ名
 ヲ立ルニシテ功ヲ立ルニシテ利
 ヲ立ルニシテ信ヲ立ルニシテ人

ニ六種ニ分シ古又ハエアルレキ古又ニテトハ世之月注ノ詞ルラ今ハ
之義ニ中畧アル故ニ本文ノ續トハナセリ然ルラ富士ノ烟ト長柄ノ
橋トハ二季有泉ノ両家ヨリ今古ノ説モ區々ナルラ或ハ或ハ
ノ辨明ヲ見レハ譬々古ヨリ讀メル富士モ長柄モ世ニ像アル物
ハ變化スキニ和号ノ意ノく石易ニシテ人ハ心ヲ慰ムキニト
新趣ト古意トノ互別ナレハ今ハ其ノ烟モナリ其ノ橋モ
ト云ニハ何モ烟ヲヨシ橋ヲヨムキトソモ世ノ序ノ所ニ
富士ノ烟ニヨリテハ今ヨリ心ヲ慰ムトモ云イ結語ニ時移リ古又モ
トハ奈長ノ後時モ移リカハリ富士長柄ノ古モ行去リ古物
ノ變化ハ様々ナレト世ノ文字アラフニト一段ノ首尾ハ明

ナリ然ラハ諸抄ノ異説アル富士ニ断不断ノ論モアラス長柄ニ
造不造ノ美モアラレト我々ノ秘抄ニ註シタレト但レ和号
ノ古本ノ秘授アラシニ或ハ古今ノ序傳ト云フ物ニ長柄ノ橋モ尽
クルナリト向クテ讀サリテ人ハ今ニト下ノ續クニトモ向人ト
讀下スニカラス其ノ餘ハ總テ先註ニ隨フレシ誠ニ世ノ序ノ稱
スル所ハハ流石ニナトハ筑波山ニカケテ君臣父子ノ因心美ヲ
重シスヨリ支那明友ノ仁愛ヲ勿心ニ貴賤老若ノ哀モラ
思ル本ヨリ儒仏ノ專論ニシテ本朝ニ和号ノ基本ナラサラ
ヤ是ラ信シテ是ラ仰クニ天地モ震動シ鬼神モ多ニ感
仰セル實ニハ序者ノ筆カト云ハレ

不明文盤一

補古歌

天文歌

伊弉册

あふいろ。ひらひら。あつら。

地歌

伊弉册

あふいろ。ひらひら。あつら。

人歌

下昭姫

あふいろ。ひらひら。あつら。
あふいろ。ひらひら。あつら。
あふいろ。ひらひら。あつら。
あふいろ。ひらひら。あつら。
あふいろ。ひらひら。あつら。

任云此之歌ハ古今ノ類ニシテ天地ノ始ニ歌アリト云ハ
ヨリ古注ニモ此ノ詞ヲ出セリ但し古注ハ世ノ自作ト
去レハ二神ノ詞ヲ以テ和歌ノ始ト云ルモ詩書ノ成
ノ謂ニシテ況ヤ此ノ詞ノ之五七言ナルヤ殊ハ一五言ノ句
ニテ伊弉之知ノ韵ニ叶ケル神通不測ノ和歌ニ誠ニ
奉朝ノ文鑑ト知レシ然ラニ神ノ代ノ文字ニ配シテハ
二十ノ子ナリトカ等ハ神ノ秘訣ナラニ強テ註スル恐
アラシクハ富羅山ノ折衷抄ニ其旨ヲ言ルヤヤハニ神ノ
詞ニハ神書ノ讀ニカモ區々ナシハ今ハ古今集ノ類ニ陸今昔ハ
漢祖ノ大風歌ニ短語ニシテ正路ナルヨリ唐ニモ歌類ノ基

本ト註セリ増シテニ神ノ世詞ノ短篇ニテ正通ナルヲ世故
ニ天文地理ノ兩儀ヨリ人知ノ題ニ分シタル聖典ノ云ハル才
ニシテ世ニテ以テ万物ノ始トシハナリ次ニ古ノ序ノ語ニテ
意ノ世ニ傳ヒ夏ハ下照姫ト事ヤウト云レハ八雲ノ世ハ
殊ニ人知ノ始ナルニ世ニ善ク知レル所ナレハ今ハ世姫ノ事ヲ以テ人知
ノ始トハセリケリ然ルニ世ノ事ヲ註シテ諸所ニ様々ノ説
ト世等ハ上古ノ事ナレハ夏ノ心モウキカメシト既ニ世ノ事ニ云レハ
分明ナラヌヲ神秘トスレシ或ハ傳輔力奥儀抄ニ世ノ事ニ韻子
ヲ用イタルカ彼ト世トハ文句ノ遠イアリ教子ノ夏ハ求韻ノ下ニ
見レシ但シ世類ノ標題ニ補古ニ歌トハ文世ノ詩類ノ始ニ

モ補セリ詩トスニ效ハ夏ニ三章ニ句ナルモ夏ニ三章七句ナルモ
神代ハ今ノ文字モ定ラズハ世故ニ之有ト云ハスレテノ歌トハ云ル
ナリ去ルハ古代ノ詞ヲ補ヒテ今世ノ事ヲ昭ラスト云キ文選
ニ題註ノ意ナラン總テ日本記ノ趣ナカラ神代ノ秘説ヲ加フ

南朝ノ奇

柿本人麿

やとてあやめおむるのまゝにささめあやうきと。因
りてはよあれもさ川の流よとら下流くると
うのの國のむらも秋津のやめよとささめ
ぬとよふやうとささめのおむるやん舟をさあさ

川よりのぬききあひたつら川よりのきゆうり
あふのやききりー玉の川のききとて
あふり

任云此等八万葉集ニ在リテ吉野宮ノ祝詞ナレハモ君臣
ノ和合ヲ讀メリトハ殆ニ天文地理ヨリ次ニ人知ノ世情ヲ
又ニ君臣ノ合體ヲ云キトナリ去レハ世ノ全宮御ノ先若臣
ノ時ヲ終レテ後ハ宮造リノ祝詞ナラハ心ヲ吉野ノ花ニ寄セ
テ其川ノ流ノ絶ヘカランニ遠ク万年ノ聖化ヲ仰ヘク長ク
石ノ風雅ヲ傳ヘキトソ但シ世ノ才四句ニ語路ノ振子ノ
調カレハ一字四テ見ルキニヤト或抄ニ世論ナリ

連子

源頼朝

あふのいしこけりーくけりよきり
いしこけりーくけりーかきり

ね云世連子ハ力州ト云フ舞絃ニ音シ頼朝ノ上洛ノ時ニ近江ノ
守山ヲ過玉ヲニ覆^{イナゴ}盆子成皿ナル見テ連子セハヤト安^{イナゴ}ニ
玉ハ平時政ハ取アヘス此前向ラ申上タレトフ

詠諾子

貫之娘

そよよけりぬききりーとらやりーよ

小端やろくまきくやんりき

和云此等ハ貫之カ娘ノ九歳ニテ讀ムル俊頼朝臣ハ其
吟シテ涙ヲ落シ給ヘリトク誠ニ幼女ノ本情ヨリ出テ切者
ノ余ヲ加ヘル所ナラン然ルラ歌類ノ才ハニ置ルハ古代ノ方ハ
モ教多キカラ多シハ貫之ノ序アルヨリ彼カ娘ノ号ヲ出シテ
先ハ其父ノ靈云鬼ヲ思メ次ニ位階ノ罪トカラントナリ然ラハ
世等ノ次才ヲ見テ選者ニ子ノ私ナク却立ノ先後ハ之
ニ據ヘ知レシ去レト誦諸ト俳諧トノ子論ハ清輔カ抄トト
ニモ誦ハ俳字ヲ用レシ古今拾遺ナトハむ不審ナリト云イ
芭蕉内ノ此五ヶ條ハ師資傳印ノ口訣アルト云ハ古今集

ノ故實ニ任テ誦諸ノニ子ヲ用イタ先ハ文鑑ノ公道ナア
次ニ選者ノ殊勝ト云レシ但シ誦諸ノ子ノ凡躰ハ八雲所抄
ニモ論アリテ多ク俳諧ノ六一種ニ其抄ナリ

求韻ノ奇

高市萬品ノ神

あさや此きふしくららんかあふよ。きらあ
あさやいんんやゆあふん

任云此等ハ清輔カ奥後抄ニ出シテ求韻ノ下ニ四首
去レト雜韻ノ体ナト是即ヤ、分明ナラス但シ通韻ノ様モ
見ルナリ或ハ長号ノ韻法ニ下昭姫ノ号アルト是モ通韻

一似テ同字ヲ用ユルニ其故ヲ註セス總テ世等ノ難涉ニカキラス
其書其人ヲ論ビヨリ自己ニ支ラ附キナリ但シ本朝ニ韻
子ノ沙汰ハ詩類ノ下ニ看合スレシ

題をくも

芭蕉庵

あこはことぬとくくうりてやあくら
うねくうりもあくらんうりもあ
ね云世等ハ祖父師ノ俳諧ニシテ世類モ教多ク中ニ多ク世
等ヲ選ビ一ル古又ハ先ニ或人ノ撰集也世等ヲ出ストテ
買人ヨリモ哀ナリケリト書撰シタレ故云羽ノ雲也

ニ感ニヌラト今ハ赤良人ヨリモト改出セルナリ誠ニ物ヲ買人ノ
費人ヨリモ劣タラシハ網アヒサコ雑魚ニ放テテ専用ナラシ如何ニヤ
彼集ノ選者ノ廉骨ナル去リヤ故云羽ノ俳諧ノ等ハ世外モ
アミタ有ナカラシハ以躰ニハ恐ル所アレ今ハ二前ガ子ノ誤ヲ改心
ノシタニ世一着ヲ出セルナラシ

七種ノ等 五七言

東華坊

おりーらや柳七種ありくた。天の雲戸のめらひのし林
とくしひの柳系のもくきとくしひのし林。雲よ
りしひの柳きくた。えやうくしひの柳きくた。えやう

神國の御のたふしつふあしめ陸形のあふまきとたや。
 まよふれしつふまもも思ふ陸洲のあふまきとたやの
 やちかふもまきつふあしめつふまもも思ふまきとたやと
 ろよよつわつるまよふれあふまきつふあしめつふまもも思ふ
 まよふれあふまきつふあしめつふまもも思ふまきとたやと
 つふまのあふまきつふあしめつふまもも思ふまきとたやと
 ちあふれあふまきつふあしめつふまもも思ふまきとたやと
 つふまのあふまきつふあしめつふまもも思ふまきとたやと
 つふまのあふまきつふあしめつふまもも思ふまきとたやと
 つふまのあふまきつふあしめつふまもも思ふまきとたやと
 つふまのあふまきつふあしめつふまもも思ふまきとたやと
 つふまのあふまきつふあしめつふまもも思ふまきとたやと
 つふまのあふまきつふあしめつふまもも思ふまきとたやと

任云以号ハ全ハ三篇七章ニシテ其ノ向ニ長短ノ格アリ其格ハ五盛全
 カ共ホ、号ナト零五山ト葛蒲歌ニ效ヘリ惣テハ五十八句ニテ章
 毎ニ二句換約ナルヲ例ニ青尾ノ約ヲ用エ去ハ先師ノ假名約府
 ニ奇偶ノ数ヲ調ヘル故ナリト口傳然レハ世々モ西ノ所ノ詞
 マリ面白ヤハ神手ノ発語ナルヲモリノ武土ハ乃矢ノ縁語ニシテ
 今早振ハ神國ノ花詞ナル例ニ樂府ノ云イ捨ナリ
 去ハ世々モ七種ノ名ヲクシ始ハ齊ナツ七種ト云テ其月スミナ葛ノ
 六種ノミ云ハトツ鶏毛菜ハ七種ノ物名ニ鶏青キテ先ハ青ノ
 陸洲ト云ヘリ或ハ面白ノ神手ヨリ鈴ト云フ子ヲ御言セテ山石
 戸ノ囀ハ句サリ観ナラハ陸洲ノ時節ヲモ云ハルナリ或ハ日本ニ云
 跡

上倭朝ニ西都ノ神通ラズイテ仰ノ子ヲ寄セタルカ厚本モ
我國ト悉皆成仏ノ語ヲ用イ何レカ思ノト讀メルコトヲ言
ム是ヲ多角ノ法ナカラ和漢ニ筆格自在ナラズ或ハ御形ノ錦
トハ其花ノ紅ナルヲ枯レテ錦ヲ敷鳩ト云イカケタル實モ世名
ノコトニ漏レシ事夏テハ法術ノ教ナラト我名ノ不幸ヲ歎キ
タルナリ或ハ名簿ノ名ニ便リテ弓ヲ袋ニ刺ラ物ト云ヘル
太平ノ林ナカラ弓ニ絃ト云フ御音ヲ取ヒリ然ルニ露ト名荷
トハ其ノ子ノ唱ニ寄ナレト富貴實加ノ名アラヨリハ太平ノ
物ノ勝レルラ云ヘリむモ起語ノ何々ノヨリ兩所ニ教ナラ結語
シテ單ニ單ノ名ラ置タル筆端ノ鼓舞ラ見ルキナリ但シ

武士ノ詞ヲ置タルハ本朝ニ今曲ノ教イアリテ先ハ諺物抄
ナカラ始ニ八王家ノ學教ラズイ次ニ武内ノ護衛ラズル
多ニ又五軍ノ虛實ヲモ知ルヘシ或ハ齊ニ陸奥トハ遠國追
おノ貢ニ寄セテ果シラ又東夷ニテモ譯ラ置シ泰平ラズヘ
リ但シ安達ハ齊ノ各所ナカラ彼里塚ニ鬼アリ氏君カ馬
ニト云ハ心ナリ技木佳ホニ寂念ノ音アリ然ルラ君母ノ音ニ
云イカハ仁和希ノ音ラズル雪ニ花字ノ移リヨリ花ノ子
ニテ前立字ヲ結シ鳥ノ子ニ後立字ヲ起ス是ヲ結前生後ノ
法ニシテ西向ノ物子ノ同キ所ニテ七種ノ名ヲ結語セリ或ハ八穂ニ
八石トハ農臣ノ諺ニ八穂ニ八石穂ニ穂カサイト田植諺ノ

徳字ヨリホトクハ七種ノ雜ナリ然レハ此術ノ精ヲモ信御
ノ此様ニ過サラント君ノ所見素ヲ云イテ天ノ羽衣ノ音ヲ
借テ来ニ擲字ノ細音ナラシメ或ハ千早振ノ詞ハ神ト云子ノ枕
ナルヲ神国ノ日本ト云イカキタル等ヲ解詁ノ字格ト称スレ
然レハ日本ト唐玉ノ句ヲ一振子ニ布タルハ号融木子白カキモ
アリテ例ニ妻言ノ格ト知レ結句ハ和漢ノ二鳥ヨリ多ク詩音
ノ情ヲ合セテ思好カキノ凡モ静カニ藤忠カ詩ノ波モ治リ
テ流竹万歳ノ号行ナレ

字訓ノ号

秋之坊

きりれはふりりととふら。おくらあ
人きしり。ふ。

任云云ハ炭子ヲ讀テ号書ニ謎詁ト云レト今ハ韻子
ヲ用ルヨリ本朝文粹ノ題ニ效イテ字訓ニ子ヲ用ユ去レハ
炭子ヲ造ラニ山ニ從フハ字書ノ常ナカラ火字ヲ人物ノ
又トハ字訓作ノ号絶ナランモ寒ケハ炭コレト讀テ金城
ノ古子ニレリトフ但レ此坊ハ賀城外ニ直テ法花一葉ノ道心
ナリ

念仰ノ号

雲居和尚

おくらあきりれのめらおくらあきり
おくらあ

のしほしほのく
くもくく十 縮しまのなるをて座山の
おもわれしと

狂云世そ八雲^{クモ}若念仏トテ尼入道ノ明暮ニ鳴テ一音ノ向ニ
六子ノ指ス惣テ一音有アリトク然ニ此和尙ノ奥ノ松嶋
ニ住シ愚堂大愚ト名ヲ希テ彼ハ禪ノ活計ヲ示サレ
此ハ種家ノ念仏ヲ勧ムニ中此ノ名僧ナリ世故ニ殆ク
聖主来迎ノ雲色ヲ松嶋ノ海ノ夕日ニ攤^{ナゲ}ヘ次ニ廬山ノ昔
トハ蓮社ニ僧侶ノまよりラヌイテ俊成ノ号ノ寂シクテ
モ思ハレ誠ニ殊勝ヲ仰クヘク誠ニ以雅ラ感スヘシ

長恨歌返寄

民部権太左推久

むらり唐土ノ帝^{ミカド}ちうて 色とろふらんきしむと
あしらのやあたれ眉^{メジロ}よそれ 花の人とのこころにあま
月も驪山の湯あてよそれ 化^カる巻^{マキ}れおと^トよ^ヨあ^アれ
ひとと端^{ハタ}棹^{サウ}よめあ^アよ^ヨれ 夏^{ナツ}空^{カラ}の水とあ^アま^マの先^{サキ}
月^{ツキ}のあ^アれ^レき^キふ^フら^ラあ^アり 暮^暮のゆ^ユめ^メの^ノあ^アら^ラじ^ジ
あ^アら^ラじ^ジの^ノあ^アら^ラじ^ジの^ノあ^アら^ラじ^ジの^ノあ^アら^ラじ^ジ
ら^ラじ^ジの^ノあ^アら^ラじ^ジの^ノあ^アら^ラじ^ジの^ノあ^アら^ラじ^ジ
を^をや^や暇^{ヒマ}の^ノあ^アら^ラじ^ジの^ノあ^アら^ラじ^ジの^ノあ^アら^ラじ^ジ

林間反鑑一

いつるもあはれまはるゝぬせの 雲のあつとをきつぬ徳なり。
ハナシの波流のさへくまらぬ うらつたの玉の殿なり。
はなりのつれなきまはるゝぬせの 西の田の神の化振あつと。
あはれまはるゝぬせのさへくまらぬ きこふもつたりの心はた。
はなりのつれなきまはるゝぬせの ねむりこはるゝぬせのさ。
あはれまはるゝぬせのさへくまらぬ とれなきまはるゝぬせのさ。
あはれまはるゝぬせのさへくまらぬ 人ゆゑもの神のさへくまらぬ。
あはれまはるゝぬせのさへくまらぬ 逢ふぬのははるゝぬせのさ。
枉云世々ハ四句ニ韻ニシテ例ニ梅韻ノ格ナリ全三冊ハ八章ニシテ章毎
四句アリ去ルハ樂天カ長恨章ニ對シテ倭國ヨリ返りたり

然るハ世々傳フ唐ノ楊貴妃ハ執事ノ神ノ化相ニテ今モ其ノ所ラム
蓬下嶋ト云ヘリ其故ハ唐代ノ太キナニ附テ日本ヲモ取ルキ心
アハハ竊ニ神ノ計ヲ以テ唐帝ニ世ノ妻ヲ知ラセ給ヘリトソ或ハ
羅浮子ノ神社考ニモ宋景濂カ日東曲ヲ引キ揚什伍ノ詞ヲ
奉ケテ世々傳ラセラルナリ
去シハ世々ノ始ニハ全ク長恨章ノ歌ヲ受ケテ前ニハ心タラヌモト
後ニハ心ニアラスト云ハモトノ二約ハ其ノ各ナリ或ハ柳ノ肩ト云
ハハ手天カ詞ヲ借テカラシムニ楊家ノ揚子ヲ云テ其母ノ揚下ニ
妊メル故ト云フ増シテ養ノ子ト云フ係テ養子ノ肩ニ前成セル是ラ
双角ノ文法ト云ハルニ其ノ後ハ一篇ノ對ヲ設ケテ其時ノ揚子ヲ

本頁文盛

云イ其ノ人稀沐ラズル化身譽ハ二人ノ傷ニ入ラフ時モ難シナル故
 容ニノ霜ヲ^イ厭フハ古クノ詞ナリ但シ驪出ハ十月ニ行幸アリテ羽
 年ノ春還リ玉ハ化身譽ノ霜ハ其比ナルニ或ハ端様ハ端正様ニ
 シテ華清宮ノ中ニ在リテ貴妃カ化粧ノ部屋ナリト其ノ人カクテ
 将^{ヨシキ}衣^イ出^イタ^イラ^イシ^イハ^イ美^イ容^イノ^イ水^イヲ^イ離^イル^イニ^イ似^イサ^イラ^イシ^イヤ^イ然^イモ^イタ^イス^イ春^イ晴^イ朝^イ
 ノ對ハ約ヲ用^イニ^イ奇^イ法^イニ^イ似^イト^イ次^イ句^イノ^イ月^イ日^イヲ^イ起^イセ^イリ^イ但^イシ^イ月^イ花^イノ
 ニ子ヲ云^イル^イ其^イ地^イニ^イ其^イ人^イノ^イ風^イ情^イナ^イラ^イシ^イ其^イ次^イハ^イ手^イ天^イヲ^イ春^イ宵^イヨリ^イ徒^イト
 云^イフ^イ子^イニ^イ君^イ詩^イ解^イノ^イ識^イヲ^イ借^イテ^イ四^イ時^イノ^イ花^イ本^イ有^イラ^イズ^イイ^イナ^イラ^イフ^イ四^イ難^イ結^イ
 任^イス^イト^イハ^イ長^イ恨^イ傳^イノ^イ詞^イナ^イリ^イ但^イシ^イラ^イハ^イ張^イト^イ云^イ錦^イニ^イ夜^イト^イ云^イル^イ其^イ二
 和漢ノ鏡辭ト云^イシ^イ其^イ次^イハ^イ向^イ始^イ終^イニ^イシ^イテ^イ何^イカ^イ秋^イニ^イ讀^イレ^イリ^イ

花ハ此ノ無常ヲ云^イク^イ月^イハ^イ雲^イノ^イ妻^イ化^イラ^イズ^イル^イ星^イシ^イテ^イ馬^イ鬼^イノ^イ露^イ
 ト消^イテ^イ長^イ恨^イノ^イ絶^イル^イ期^イモ^イナ^イシ^イト^イ志^イル^イハ^イ春^イ宵^イノ^イ年^イヨリ^イ次^イ妻^イト
 ノ對^イラ^イ置^イテ^イ再^イヒ^イ秋^イノ^イ子^イヲ^イ以^イテ^イ四^イ序^イニ^イ轉^イ変^イノ^イ終^イリ^イト^イ成^イル^イ也^イモ
 銷^イ線^イノ^イ法^イナ^イカラ^イ四^イ季^イノ^イ次^イオ^イノ^イ自^イ由^イヲ^イ見^イル^イシ^イ其^イ次^イモ^イ長^イ恨^イノ^イ絶^イル^イ
 ハ^イ重^イハ^イ十^イ重^イト^イ云^イク^イカ^イケ^イテ^イ何^イカ^イ知^イラ^イス^イ海^イ上^イニ^イ玉^イ捧^イ金^イ鼓^イノ^イ有^イ様
 ナ^イ云^イリ^イ然^イル^イラ^イ嚴^イ守^イト^イ守^イ子^イヲ^イ云^イル^イハ^イ向^イフ^イニ^イ名^イ又^イ人^イノ^イ様^イニ^イシ^イテ
 總^イテ^イハ^イ彼^イ等^イノ^イ縹^イ緗^イヲ^イ云^イリ^イ其^イ次^イハ^イ世^イニ^イ傳^イフ^イ其^イ地^イハ^イ日本^イノ^イ熱^イ田
 ニ^イテ^イ尤^イ在^イト^イハ^イ彼^イ等^イノ^イ玲^イ瓏^イヲ^イ云^イク^イニ^イ罪^イテ^イハ^イ熱^イ子^イノ^イ縁^イ語^イナ^イリ^イ但^イシ
 化粧ハ化粧ナカラフニ^イハ^イヒト^イ讀^イム^イヤ^イ然^イシ^イハ^イ其^イ人^イノ^イ容^イ色^イヲ
 思^イフ^イニ^イ愛^イミ^イ人^イ向^イノ^イ顔^イヒ^イテ^イラ^イハ^イ其^イ余^イニ^イ喻^イル^イ物^イナ^イレ^イト^イ云^イク^イ

例ニ味天ヲ和若花一枝ヲ含テリ其次モ長恨ノ趣ナラハ此詩ノ
オレト云イカテテ文月ノ便ト俵ニ結ビタル和漢ニ通用ノ
法ナカラハ一五早ノ手余波ヲ味フハ其次ハむモ結五早トハ類ハ
唐帝ノ好色ヲ諫ムニ似テ實ハ神國ノ奇特ヲ各々ニ一節
ノ趣意モ世所ニシテ又五早ノ虚毎モ世所ナレシ世故ニ四ノ
國ト云フヨリコモキ蓬カ嶋ト詔路ヲ郷言セタル和漢ノ文法ニ子
ノ私ナク世等ヲ之類ノ文鑑ニシテ四海太平ノ臣等トシレ
但レ世作者ハ好莫ノ社司ニテ世身ノ趣向ヲ思イ寄セシ先師ハ
其人ノ位署ニ代リテ斯文ヲ作レシ由ヲ獅子庵ノ遺稿ニハ
存置レシカ思フニ其ノ人ハ伊勢ノ神官ナルヤ

詩類

和歌詠詩序

渡部任

先師カ川テ武江ノ芭蕉庵ニありテ其書ト
白氏文集ト云ク和漢ノ詩ノ名ト稱スルナ
詩ヲ和漢ノ詩ト云フハ其詩ノ名ト稱スルナ
ハ詩ヲ和漢ノ詩ト云フハ其詩ノ名ト稱スルナ
七言ありちやとされト漢書ノ通語あり
その詩の拍子いさなりかきわく多し大和歌
の五七詠ありたりとされたり又その詩あり

海心おのの拍子いね音の五七語かたうね
世の凡俗誰も躍々説きまていふ七の句拍子也
みふふおの伊呂波とて七々五のふふあん
やしてたまふしおの清あまう一筆海の家般傳
の趣よりい五七の語路とり阿加菩薩多れ
約と用ゆまういこれの亦用たり評あ
假名の詩とけくりて又言七言の清格あしや
となぬい志よりふさくおのふよまねい
おの五七言い真名字れあ拍子あし評あ假名
の二言一言あし物の情とけりかたうさうさう

十言字と合とて七言とつまふいふ言の十言あし
い亦さくし言あしはしいね音の通用い一子
あしと一子とつまふいふ言ありて一言あれ
なりしれれし七言の中い八言と五言れ中
六言と一旬の伸る拍子あしいね音の音
字あしりといて詞けいひの優美あれ詩種
の園雛の一草は句あれい八言と一旬の言
もさう一物と八言の拍子あしあまう子の
息と括てまよ句讀の法とあし一しれ
七言の七とつれ五言の五とつれいね音の

と子附の字面の長短にけ論のあはれはたは江淹の
詩の序の詩の序の詩の序の詩の序の詩の序の詩の序の
一書ありとてあはれ詩の志也とていふ字のあはれ
とらりとてあはれ詩の志也とていふ字のあはれ
勅字ありとて勅字のあはれとていふ字のあはれ
ん会とてあはれ詩の志也とていふ字のあはれ
千妻の万態をうとてあはれ詩の志也とていふ字のあはれ
とてあはれ詩の志也とていふ字のあはれ
奇人のあはれ詩の志也とていふ字のあはれ
あはれ詩の志也とていふ字のあはれ

歸とてあはれ詩の志也とていふ字のあはれ
花とてあはれ詩の志也とていふ字のあはれ
それ一言とてあはれ詩の志也とていふ字のあはれ
といふとてあはれ詩の志也とていふ字のあはれ
口体とてあはれ詩の志也とていふ字のあはれ
製作の次第とてあはれ詩の志也とていふ字のあはれ
近く人間の始終とてあはれ詩の志也とていふ字のあはれ
と階梯とてあはれ詩の志也とていふ字のあはれ
子歳とてあはれ詩の志也とていふ字のあはれ
けまとてあはれ詩の志也とていふ字のあはれ

狂云世ニ假名ノ詩ト云フハ是ヲ本朝ノ濫解ニ是ヨリ法格ヲ定
ムル故ニ先ハ詩類ノ題下ニ付序ヲ置テ前ニ歌類ノ序
アハニ效ヘリ去ル獅子庵ノ遺稿ナレハ也

或ハ此序ニ白氏文集トハ首シ白氏天カ我朝ニ来リテ
日本ニハ詩ノナキ者又ヲ嘲リタレハ住吉ノ神ノ歌ヲ以テ
和漢ノ通情ヲ示シ給ヘルカ我朝ハ争テ一奇ノミナラン
詩モ此ノ如クト云ハ又ハカリニ何トナク彼カ文集ホラ奉テ
詩奇ノ論ニトハ云イ出セリ

或ハ天上ノ詩格トハ南海寄傲傳ノ才口ニ在リテ天子モ
呵利ノ自嗟詩ニ由染便叙俗離貧還服緇如何
兩種^ニ夏^ニ我君^ヲ嬰^ル女兒^ノ其外ハ龍樹馬鳴ナトナ余卷
ノ詩賦アリク

或ハ詩經ノ之曰五トハ先ハ其雷^ニ章有梅^ニ章ナト其
外之曰五ノ句拍子アリテ之ヲラモ一句ト云イハ子ヲモ
一句ト云レト二句合セテ一句ノ意ナル物多シ故^ニ棟
五七ノ語路トハ云ヘリ
或ハ漢音^ニ通ヤストハ唐人ハ文字ヲ声^ニ唱ヘ我朝ニハ
文字ヲ訓^ニスレハ漢文ニ五七ノ長短アルモ何ノ拍子モ
知レ又音ナリ如何ニ心得テ日本ノ詩人ハ八千里ノ外
ノ詩ヲ子ヲソト也

或ハ凡俗語モ躍口詭モ同シ七々五ノ拍子ナガラ是カラ
 見レバ近ハカハルニルナト此等ハ四之ノ拍子トテ和奇ニハ
 之ハノ拍子ヨリ二五トモ五ニ凡用ル也凡雅ト俗談トノ差
 別ナトハ拍子ニモ知ルキカ辟言ハ平生ノ俗話雜談ニ
 モ五七語ノ拍子ヲ知ル人ヲ嘲^ハ上手トモ口快者トモ
 云ハ増シテ筆ヲトリ紙ニ向イテ我ハ文者ナリ^ハ思ハシクヤ
 或ハ二子ニテアルヲモ一言トハ委ク字ト一言トノ註解
 ニメテマ子ヲ合セテセ言ト云イテマ子ヲ合セテ五言ト
 云フキ其ノ所以ノ再釈ナリ辟言ハ九言モ八言モ物ノ拍
 子ヲ知ラシ人ハ總テ呂律ニ合ハスキラ五七ノ語路ト定^ル

拍子ヲ知ラヌ人ノ捉テラシケ故ニ和奇ノ字アリテ詩經
 ヲ謹文ニ出セルナリ去レハ詩經ノ卷頭ニ南々^々雉鳩在河
 之洲トハ一句ノ意ヲ二句ト云レハ本朝ノ詩ニモ二句ヲ一
 句ニメテ子ヲ一言ト云キハマ子ヲ合セテセ言^{ナリ}
 ト根本ノ詩經ヲ鑑ニメテ一字一句ノ私ナキ是ヲ古人ノ
 先格ニヨリテ一條ノ法度ト云フナルハ誠ニ五七ノ拍子
 ノミ詩經ノ先達モ論セサランニハ後ニ本朝文鑑ノ
 面皮トスヘキハ此論ナリ
 或ハ韻子平以テ總テ古人ノ法格ヲ破ラヌ糠^ノ所ノ
 異ラハ増シテ本朝ノ手柄ト云レテ次ニ律詩ノ法トテモ

總テ作者ノ文覺ヲ以テ永ク假名ノ詩ノ風体ヲ起サハ
今日ノ人ハ明日ノ師トナリ明日ノ詩ハ百世ノ文鑑タラシ
去レハ本朝ノ詩ノ元祖タラシハ先ハ詩行ノ擬古ヲ
子ヒテ古詩ノ風体ニ效ヘルヨリ次ニハ和漢ノ通情ヲ
アラシテ漢土ノ詩人ニ車坡山谷カ風ヲ慕ヒ本朝ノ文者
ニ其官家源順ノ名ヲ思ハサランヤ然モ江淹ノ序詞
ヲモ引テカウ古人ノ法格ヲ見合セテトハ和漢ノ通用ノ
論ニ人一時流行ノ備トモ云フレ但レ此序ハ先師遺
稿ナラ暫ク白狂名ニ寄セテ爰ニ且言ヲ傳レハ
結語ハ踊ノ一字ヲ以テ序者ノ誠恐誠惶ト見レシ

擬古二詩

四季花鳥 五言

本飛心

花

君不見も春と秋と。 花はけい葉おのり。
美らけらけはくへふら じふあやむ我こそ。

鳥

夏あけく冬はゆ。 ちかふあはれあり。
世は河うく此はむの ちかふあはれあり。
紀云花ノ三草ハ名利ノ感ナリ去レハ人間毎ニ在リテ

和歌ハ一世ノ凡俗ナルヲ知り各歌ハ千歳ノ君子ナルヲ
見ルハ和葉ハ兔毛角モ掃スツキニ各花ハ今惚乱
スト花ハ落葉ノ口多ク人々メタル詔急ナラニ分明
ナリ然レハ其ノ葉ヲ和ニ喩ヘ其ノ花ヲ各ニ喩ヘテ葉ニ
ハ酒色ノ両歌ナト花ニ喩フルハ的面ナラン或ハ之ハノ
句ニ至リテサ化ノ葉ノ二字ヲ童子タル或ハ思詔ノ格
モ似タレト是ハ本注ノ法ニ古詩ノ体ニハけ格アリ或ハ
君有ノ二字ハ歌行ノ常詔ニノ世向一寺ノ人ヲ指メ詞
ナリ或ハ花ニ惚ムトハ江上被花惚ナト杜公ト詩ノ
詞ヨリ静心ナクサ化ノ散ラ下モ絶ヘテ櫻ノナカリセハ

トモ詩奇ノ人ノ情ヲ汲ミテ花ニ和ル歎息ナリ然レハ
標題ニ擬古ニ詩ト云ル前ニ歌類ノ之歌ニ效テテ多ニ
ニ詩トハ題ナシナリ花モ此詩ハラコトノ韻ヲ用ユ叶韻ハ
總テ多ニ效フレ但シ花仙ハ先師ノ詩ヲナリ
和云鳥ノ一章ハ衣食住ノ感ナリ去ハ人向ニ世ニ在リ
テハ寒暑ノ往來ニ苦ホアリテ富貴貧賤モ其レニ
随フ者ナリ然ルヲ我身ニ感スレハ衣ハ行先ノ有ルニ
随ク食ハ行先ノ須^{モテナシ}任セ住ハ行先ノ留ルニ遊フ者
ト此ニハ苦ホ交ハリテ野山ノ鳥モ似ナラヤ然レハ
假リノ世ノ苦ホヲ認テ憂シツラレトハ如何ニ思ハヤ

本朝文鑑

三

我ハ往還ユキ古巢アハト鳥ヲ愚ニテ身ニ喩ヘテ自向
自答ノ詞ヨリ應無所佳ノ心ヲ示レタリ増シテ
知花ニ鳥ヲ云ル鳥ノ巢ヲ己カ家ニノ例ニ時鳥ホトキスノ往
還ル急ナラン本ヨリ先師ノ記モ云ル天下ニ幾イイクニ處ノ
獅子庵アリテト古巢ハ飯野ノ田地ナリ去トハ花鳥ノ詩
ノ四季ヲ云イナカラ夏ニ知花ノ甘夏ノ云ル似ホカテ及ニ
往還ユキト云フ詞ノ顛ニ知花ノ雪ト云クカケタル甘夏ト冬
トシ離々同シテ是ヲ隱見ノ法ト云フ也此等ハ新朝ノ風流
ニノ唐國ノ詩人ヲモ欺アサムクキ所ナリ誠ニ奇ニシ妙ナルヘク
妙ニノ神助アリト云ハ正ニ本朝ノ詩ノ卷頭タラニ此等

ノ教誡ニ花鳥ノ情ヲ顯テ家ニ一條ノ道ナカラシヤ近ク
此詩ヲ學ウシテ遠ク其人ヲ嘲ルヘカラス

獅子庵ノ詠 七言

本巻巻尾

松

松とあそべいねも森らむ。 我といひておとをばり。
吾つちのりも月のてしむ。 竹よあねとてさねの。

茶

梅とあそべいねも森らむ。 茶いねとておとをばり。
吾つちのりも月のてしむ。 竹よあねとてさねの。

本朝文鑑一

三十七

望と云ふは性ふれ。 利体の家の教養も何れと
我々凡雅の旅とあれ。 此の物ぶらうゆんせ。

紀云松ノ一章ハ明友ノ趣向ヨリ藤毎凡カ松ヲ讀テ
松ヲ昔ノ友ト云イ吾子歎カ竹ヲ愛ソ竹ヲ北君ト云
正和漢ノ風流ヲ取合セテ詩吾ノ通情ヲアラハセリ況ヤ
松竹の名ヲ類シテ松ニ公字ノ所以アルヤ或ハ松露堂
トハ和号ノ詞ノ云々カケニテ松ニ根字ノ鎖辞ナラン或ハ
雪ノ日二月ノ夜トハ松二月雪ノ形容ヲ附ケテ字面ハ
四時ヲ含メタリ誠ニ死生ノをヲ思ハシニ曉ノ露堂ノ教

ナラシ三遊ノ子ハ莊子カ筋骨アリテ逍遥ノ筆カモ
歎スヘク凡雅ノ画情ヲ尽セリト云フヘシ

紀云茶ノ一章ハ俳諧ノ趣向ヨリ和漢ノ詩吾ヲ取合
テ楚辭ハ夕々十六梅ヲモ亡レケン何トテ朝夕ニ歌フ
吾ニ讀レヌハ茶ノ遺恨ナラン去レト我家ノ俳諧ハ詩
歌ニ肩ヲ双ヘカタク前次豆ノ會ニ吾ヲ注ラント例ニ
虚実ノ文法ヨリ例ニ俳諧ノ筆格ナリ去レハ凡雅ノ上
ノ揖讓ヲ以テテ麻茶ノ飽体ヲ見ルキナリ
紀云五ノ一章ハ教奇者ノ趣向ヨリ凡雅人ニ敵對セリ
所謂ル法性寺笠ハ洛外ノ名物ニソ竹ノ皮ヲ以テ造ル

カ多クハ茶人ノ煙次等ニ用ユケ故ニ利休ノ各ヲ借テ
 隱者ノ風流ヲ中ニモ以雅ハ旅行ノ鑄カビアル云ハリ
 花ノ芳野トハ庚午紀行ニ「芳野ニテ櫻見セウノ梅木ニ
 ト云ル先公ノ和句アリテ蕉内ノ人ノ常談ナレハ本朝ノ
 詩ヲ思イ立テ其祖ノ遺詔ヲ傳ヘサランヤ爰ニ以テ
 骨節ト見レシ總テハ俳諧ノ寂賞ヲ云ルニ盛衰ノ法ヲ知
手也

和漢賞花ヲ 五言律

花ト一トもあらく　　らん人あらくも
 わんんのん解れらしり　　はくくのんあらくも

花ト一トもあらく　　らん人あらくも
 わんんのん解れらしり　　はくくのんあらくも

和漢賞花ヲ 七言律

花ト一トもあらく　　らん人あらくも
 わんんのん解れらしり　　はくくのんあらくも
 花ト一トもあらく　　らん人あらくも
 わんんのん解れらしり　　はくくのんあらくも

ハ牡丹ヲ云イ我朝ノハ櫻ヲ云テ其趣ハ異ナリトモ
其意ハ同シキトナリ次ニ後對ノ鼓ニ咲トハ唐玄宗
ノ遊車ニシテ時ナラ子トモ花ノ咲タルヨシ羯鼓樓ニ則ノ
詩ノ意ヲ借り用イ歸ニ散ルハ奇ノ詞ナレハ云々ニモ
和漢ノ情ヲ對シ殊ニ哀ホノニ相ラ云ハ西ノ鳴カ鳥
僧ノ對ト云フトモ花會々ラ尺ハ所アラシカ或ハ唐
ニ立野トハ古今佳事ノ俳諧ニ奇ヲ借ツテオニハ和漢ノ
題名ヲ結シオニハ詩奇ノ通情ヲ顯ハス云々ニ起結
畫微ヲ味フシ去レハ五言ノ詩ハ本朝ニ陵ヨリ起リテ本朝ニ終ル龍
カ評ニモ云ハル此等ノ次オハ選者ノ心得ナカラ本朝ニ詩格

ヲ定ムキ作者ノ粉骨ヲ知ルキナリ
我云月ノ詩ハ俳諧ノ体ニ效ヒテ全ク虚誑ヲ尽セリト
云ハレ去ルハ和漢ニ月花ヲ貴シテ本朝ニ詩格ヲ定
ムキニオハ我朝ノ和奇ノ凡体ニ效イオニハ我朝ニ俳諧
ノ筆格ヲ立ツレシ彼ニ五言律ト云イ此ニ七言律ト云
ハレ題ノ次オハレ謂ナリ去レオニオニ句ハ金源シカ
禁止ノ詞ヲ借リテ安仲磨チ飯野ノ吟ニ寄ス先ハ
我朝ノ歌辭ソト見ルレシ次ニ前對ハ詩奇ノ詞ヲ
ナラテ微瀾臥王塔トモ糸女波金不定トモ共ニ
古詩ノ次オヲ寫シ月ノ桂ノ實ヤハル光リヲ花トラス

ハカリニト讀タル古歌ノ情ヲ合セタリ次ニ後對ハ子歎
カ故直ニ寄セテ雪ニ山陰ノ友ヲ憶フトハ云々雪初晴
月色清明ト云ルハ字ノ意ヲ借リ用ユ然ラハ露モ
更科ト云ルモ露ヲ晒スト云イカケテ共ニ天ノ皎潔ヲ
ヲ露ト露路トニ形容セリヤヨリ會愁ノ山陰ヲ云々
ヤニカケト訓テ更科ニ對シタル和漢ニ不思議ノ各所
ナフニカ増シテ友ノ字モ婉ノ字モ和漢ニ月下ノ風情
ニ千里外ノ詩ヲ合フメ厨メカ子ツノ歌ヲ合ハス此等ヲ
托物比魚ノ体ト知レシ然レハ結句ハ一ニノ趣ヲ結ヒ唐
ノ詩人ハ旅霏ノ月ヲ見テ故郷ノ妻ヲ思イ焦レタル

我朝ノ各月ハ辛ト諸書ニ月ヲ詠メテ友様ノ物思イモ
アラストハ辛ト妹トノ御意ヲ云ル此等ヲ倭語ノ自在
ヨリ無心所着ノ体ナカラ俳諧ノ文法モ多クナルハリ
本朝ノ詩格モ多クナルハ或ハサレトハ任他ニ友様
ノ畧語ナレハ是ラモ和漢ノ通詞ナラシ或ハ別ニ友様
後ニ物ヲ思ハスト云ル同字ノ差別モ多クニ效フヘシ

道遙遊

五言

蓮二房

あゝのそよ中じ。おぼれははらひしり。
きら〜とよあねや。かく獲て風味なり。

紀云詩ハ言ニ斐翠ノ眸ハ掛物ノ賛ナルヲ今ハ道遠遊
ノ之字ヲ題シテ凡雅ノ是非ヲ掃却スルモ其鳥ノ瘦
志爾ナリ詩ノ意モ見ツシヘシ然レハ人向ノ好悪ノ中ニ
霖レハ我鳥覺レハ鳥為我ト云ヘシ在子ア齊物
ノ意ナリトラウ句法ニ錯綜ノ自在ヲ見ルシ或ハ鳥ヲ
世間人ヲ指シ仰象ニ人ノ賤弱ニ在セ儒門ニ相難如何
意ナレハ我世情ノ味ニ尽キテ凡雅ノ保表貶ニ心ナレト也但
鳥差ハ前ノ鳥ヲ皇子テ是ヲ墨字ノ格ト見ルシ

赤花鳥詩有感

五七言

澹郊狂

いし。いしあり。花の人むあしく。
今も。むも。の。名の。これ。あめ。
は。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。
あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

我云詩ハ先師ノ遺言ニ重垂前ノ追憶ナリ去ル季白
カニ五七言ニ效ヘリ李太白憶友詩ニ秋風清。秋月明。
落葉聚。還散。寒鴉栖。復驚。相思。相見。知。
何。何。此。日。此。夜。難。為。情。トアリ然レ其詩ハ六句ナレモ
秋風ノ句ハ落葉ヲ起シ秋月ノ句ハ寒鴉ヲ起シテ
其詩ハ六句ニテ四句ノ意ナレハ此詩ハ十二句ニテ四句ノ

意ナラシ然ラハニ子ヲ一ニ言ト云イテ十子トナマ子ヲ一白丸モ
 兼用ハ多クニ同シカレト去ト下其詩ハ之々五々七々ト亦
 一タルニ假名各ニトタト亦フ付ハ意アリテ詞タラス是ハ
 長短ノ句法ニモ似タレト其レハ其句ノ置所ヲ定カハ
 別ニ長短ノ詩格ハ有レシ此等ノ法格ハ千美ニ別ナラシ
 何カハ我朝ノ假名ヲ以テ漢家ノ真名ニカカシヤナリ
 去レハ花鳥ノ二字ニ詩格ヲ起シ今ハ花鳥ノ感ニ詩格ヲ
 結シテ漢ニオオカハエケセテノ韻ヲ用イ倭ニ渡白狂
 ハククスツノ韻ヲ踏ム一字一点ノ私ナラシハ若ヤモ師
 遺命ヲ傳ヘテ世ニ付一格モ有ラシカ也

秋思

尾上の藤の秋とふれよ 耳のふらふら老のふるさと
 けらのふらふらめいとまはか ちあいのねをさとまのむらり
 狂云此詩ハ眼前ノ秋情ヨリ我身ノ老ヲ感シタル徒然性ノ
 四季ノ改ニモ世ノ律^{オホシ}モタラヌ身モ空ノ名残ノ惜キト云ル
 光陰空過ノ嘆息ナリ然レハ我輩ノ紅子モノ色ヲ春花トモ
 詠ムクハ四季ノ風雅ヲ言フニホントナリ況ヤ明日ヲ待チハ
 天ニ風雨ノ變化ヲ云イ今ハ生ノ無常ヲ云フ或ハ紅葉ヲ
 花ト云ル杜牧カ山行ノ詩ヲ借テ世ニ一草ノ將^{シラキ}トヤセリ但シ世老
 ハ濃^シ山縣^ノ之^ノ輪ノ山下ニ南居ス風雅ニ云宿ノ侍アリ云レシ

十月梅

二所堂

此もむし一を宰府にいぬ ほとと仲のあきとあきん
ゆあしひはあふふれ 一子の節の園のこころ

任云此詩隱見は全句梅字はハスむも一六天神所詠
ナラう咲や世花ハ梅ノ夏ニソ腰句ハ石依ノ井草多鳥ノ落句ハ奇已
P 早梅ニ言セテ詩子ニ言ヌラ都タル總テ留守ノ一子ヲ拈ス
俄僧促織ヲ古詩ニ章 宮上人

其二

たひかりしきふゆかき ふうふあつたひんあし
けよその長刀もあはれ 柳あぶかりてあふふいん

其二

ふふあつて 柳葉にあけ ふうふあつたひんあし
あつたれぬふと灯とあはれ ちかやふいふあふふいん

其二

けふあつてふふあつて ふうふあつたひんあし
あつたれぬふと灯とあはれ ちかやふいふあふふいん

任云此ニ章ハ古詩ノ体ニテ何レモ促織ヲ起句トセル詩経ニ多ク
世格アリ去レハ促織ト云フ虫ノ指レテ情キ古ヌキニ兼ノ者知
暖ム時ハ花モ片輪ニ咲テ好カラヌ世故ニ其題モ俄僧トハ云レリ
其ハ詩ノ情ヲ設ケテ古ニクノ長刀ニ思フ知ラセシトハ例ニ凡雅ノ

林朝文鑑一

三十四

畫實ヲ拈スレ其ニハ遠玄ニ氣色ヲ瀟シニ胸句ニ田舎字ノ格ヲ
 用イ釋句ニ墨墨詔ノ格ヲ用エむモ和ノ漢ナルハ其ニハ詩ノ姿
 シ飾リテ花ニ心ト云レヨリ小蝶ノニ子ヲ思イ言セタル況ヤ促織
 ノ手利ナカラ蝶羽ノ撲撲ニモ方タルハト青チハ彼ニ恥カセ
 僧ノ子ニ情アリテ以雅僧愛ハ世誑ナレ但シ作者ハ宮田氏ニ
 濃ノ山縣ニ巻生テ常ハ南遊ニ在リ向テ高田即ト稱セリ

山中尋師

得巴

口の松よとほときとちかれ 畚めり持てまふかゝり
 行をたれなく底に痛ふ心 向り音のなるといふ
 和云詩作者の故アリテ美濃ノ山屋ヲ廻ルニ山道ノ艱難ヨリ

民家ノ不自申ラ云ナリ去レハ畚振ト云フ夏ハ擔賣ノハ商今
 云レ且其國ノ俗談トフ總テハ山家ノ般客ニハ思情ヲスレセリ
 上云レ但シ作者ハ得能キヲ越ノ福之住ス東華寺者乃人ナリ

碓坊土吏 并序

石依兔

外々市中の商人もほとけりとも 市中此處者
 月もたれぬこの國の市もさうりて 掃ふ所義とな
 しとせむとのうさりのむかひとや ちか行ま
 南遊の真のあかきとて 津庵の隣りのふかきと買
 たりてたまたまの向と持ちて さらさらのふかきと買

所思

文石

いゝらねよぬこきてぬね
ふらふらふのけしとやけい
くぬぬのぬぬぬぬぬ
人のくくくぬぬぬぬぬ
奴云世詩ハ仕度カ題ヲ備テ人向ノ是非ヲ嘆息セシ先ハ聖子
カ悲糸ニミヨリ前後ハ無心所着ニ世路ノ區々タル云ルナラシ
但シ作者ハ甲陽軍内トシ過角ヲ書傳テ姓氏ヲ録セス

見月戲作

各東羽

誰々々々々々々々々々
月のやまふかたのよ
うつゝ男のねらふかた
いづれもさすのよれぬ
狂云世詩ハ哀郊カ月詩ヲ備テ天津ハ女ハ婦城カ而歌

ラニテ或ハ月言ラ月都ト云ル詩云ニ多ク用ヒ来リ然ハ
世ニ云フ桂月ノイワシカ月言ノハ女ニ通テ今昔ハ子ノ
名ニ逢ルハ八月十五夜ノ日出度サト題ニ戲ノ子ラ云ルモ
俳諧ノ筆格トムレ但シ作者ハ濃ノ北野ニ任ス各書氏ノ凡テ

野系

江北信

秋のよふれはやくのせや
ゆき雪のふり秋のあけ
とれもかゝる子ぢや下しは
秋のよふれはやくのせや
狂云世詩ハ首尾ノ吟ニ和漢ニ格ヲ用ヒ来リ去ハ人向ノ
柔花ヲ思ハ秋ノ花野ノ色々ナシ中ニ誰モ我ハト思フ
夕ラシ野系ハ花ノ角素ナシ誠ニ凡雅ノ鑄ニシテ作者ノ喩ハ

ハ身上止レ但ニ無老ハ農ノ如納ニ産ニテ穉ニ葉山ノ荏靡ニ嘉適ス
或ハ茶ヲ好ミ以雅ニ遊ル能田舎ノ老醫ナリ

送越老明 三五七言

渡吾仲

ニホ一袖のむ此る重くあつて
いよ一川の流もはくさね
今もねきけはかみとあつて
へと秋のゆふさうれはとれ

ね云世詩ハ字面ノ伏ヤウ袖花ト松音トニ寄セテ夏末ニ
秋帰ル意ラムルをモ別恨ノ風情ヲ尽セリ但シ老明ハ
越ノ直江津ノ僧ニシテ蕉門ノ風雅ニ遊リトフ

蠅

岩野裏

蠅とよし蜂とあつて
瘡とよし蚊とあつて
香とよし匂のあつて
あふ風のきくわりのと

狂云世詩ハ政公ヲ憎蠅ヨリむモ和風ノ情ヲ示スニ前對ハ虚ニ後
對ハ實ナル云ニ五言律ノ風格ヲ知レシ況ヤ秋風ノ便アスト和音ノ
風情ヲ附ヤウフコ宣事特ニ俳諧ノ筆格凡誠ニ假名ノ詩鑑ト云レ

鶯

伊東怨

誰々そととくやよはらん 竹よみぞむつたあそむつ

大月六盤一

あまのまぢの星よ帰るに　くまのいぢるをえまかき
狂言詩ハ管ノ姿情ヲ尽セリト云レ然レニ管ハ雨ヲ苦ム鳥ナリテ
和訓モ雨苦事靴ト云リトウ皇縫ハ右ノ各所ナカラサハモ花立
モ管ノ事ナリ但レ作者ハ教ノ敦賢ニ任ス伴吹ギノ俳士ナリ

行路難

渡右の靴

年よ故あり園よ離れり　早の走七金よふよりね
舟を枕よあももふりね　あつれ長者の歸そすや
人よ故ありのこに都やは　あつれふれ老のゑより
津のねし腰よきこりね　入りのやぶらまよあつね
思らふよとや飛ぬのぬき　おねの馬よふり

そとそ　あつねの鞆よふり　そとそ　あつねの念御よふり

狂言詩ナニ句ナニ節ナリ去ハ樂夫カ行路難ヨリ人間ニ等テ
ラ云レ其一ハ師走ノ坂トハ内屋先ヲ金ハ及ス人間ノ暗路ハ
爰ナレ其ハ世間ノ沙汰ヲ道テ枕ニ分限者ノ歸擣ノ向トナリ但レ
枕ハ、邪邪ノ棠花ヲ云イテ真野ハ長者ノ通称ナリ其二ハ人間
白羽ヨリ作者モ此年ハ初老ノ會トシ總ラハ野七里山七里ニ老坂ノ
草臥ラレレ其ハ人間ノ大其ハ其金ハ以テ我ス時ハ高車馬
ノカミ及ス金印次第ノ任モ事ナラ一念一吸ノ言ヲ以テ速ニ往
スキトナリ去ルハ白居易カ君ノ言ヲ備テハ官絛ノ筆ハ云々ナリ
君王ハ幅ヲテ富貴ノ人ヲ教訓セテ事ナラモ手ノ言ヲ以テ誠ニ知漢

ノ法アリテ等ラ長編ノ鑑トスレ但シ作者ハ渡部氏ニ先師ニ世ニ万ノ
稿子ナリ常ハ高山ニ世ヲ通シテ連ニ肩トテ三耘耕セリ

韻 叶

ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	ニ	ヤ	ラ	ワ
イ	キ	シ	チ	ニ	ヒ	ニ	井	リ	イ
ウ	ク	ス	ツ	ヌ	フ	ム	ユ	ル	ウ
エ	ケ	セ	テ	子	ヘ	メ	エ	レ	エ
シ	コ	ソ	ト	ノ	ホ	モ	ヨ	コ	オ

山崎氏蔵
山崎氏蔵
山崎氏蔵

